



榎本千賀子 (えのもとちかこ)

東京都出身。写真家。写真研究者。2016～2019年まで金山町教育委員会職員として「村の肖像プロジェクト」に携わる。町の映像資産の調査収集、関連する聞き取り調査、展示、ワークショップ、写真集の編集を行い、同事業を通して金山町に暮らす人々の中に息づく考え方、暮らし方を顕在化させた。本ツアーでは同プロジェクトについて解説。



伊藤たまき (いとうたまき)

2016年よりやないづ町立斎藤清美術館に学芸員として勤務。専門は日本美術史。会津出身で世界的に活躍した版画家・斎藤清の作品を主要なコレクションとする美術館として斎藤清の多様な側面をさまざまな切り口で捉え直している。本ツアーでは、斎藤清の代表作「会津の冬」シリーズから只見川流域を描いた作品をとりあげ、日本の原風景について論じた。



齋藤理史 (さいとうまさふみ)

東京都出身。2019年より昭和村からむし振興室長。本ツアーでは、からむし工芸博物館入口で行われていたからむしの糸つくりや機織りについての解説や、展示案内により昭和村の人々にとってからむしがどのような存在なのかということや昭和村の暮らし方について伝えた。



中野陽介 (なかのようすけ)

千葉県大網白里市出身。2012年より只見町役場に勤務。専門は森林生態学。只見ユネスコエコパークの登録と関連事業を担当し、事業の企画立案運営に携わる。本ツアーでは只見町プラザセンターの職員とともに奥会津の自然環境、田子倉ダム、田子倉ダムに沈んだ田子倉集落の歴史と文化を伝えるふるさと館田子倉を案内。



板橋淳也 (いたばしじゅんや)

福島県三島町出身。2019年10月より三島町教育委員会生涯学習課長。前職は三島町生活工芸館長。1970年代から継続している三島町の生活工芸運動を継承発展させ、「生活工芸アカデミー」の開設や手仕事が生まれる空間の再現として「工人の館」をオープン。本ツアーでは、生活工芸運動が生まれた背景と現状などについて解説した。



五ノ井智徳 (ごのいともり)

福島県金山町出身。金山町教育委員会教育係長。本ツアーでは旧玉梨小学校に収蔵している弥平民具について解説。地域の暮らしを伝える民具の意義を伝えるとともに、今後の活用方法についての課題を投げかけた。



井出寿一 (いでじゅいち)

福島県川内村出身。2011年の東日本大震災時は川内村総務課長。災害対応に従事し全村避難となった川内村民が避難した郡山市で避難所運営にも携わった。2012年の帰村後は復興対策課長として川内村の復興と除染に尽力。2014年役場退職後は環境省福島環境再生事務所に勤務。2019年より一般社団法人かわうちラボ事務局長。



福島県西部の山間地を占める奥会津地方。豪雪が育む豊かな自然環境は変化に富む景観と農産物を生み出し、自然に根ざした生活がコミュニティを支えてきました。また豊富な水資源は水力発電によって首都圏のエネルギー供給を支えています。本ツアーでは、奥会津の5つのミュージアムを巡り、美しき、豊かき、そして抱える課題に触れました。また、2016年に原発事故からの避難指示が全域解除となった川内村で、山の暮らしを大切に帰村後の村づくりをしている方に随行いただき、奥会津と被災地、それぞれのコミュニティ再生についても考える機会としました。

大きな奥会津 小さな博物館

スタディツアー



通行禁止
このダムは、
電力会社所有の
施設であり、
一般の通行は
できません。

四季舎

電力開発株式会社



day 1

スタディツアー

日時：11月9日(土) 12:00~17:30
齋藤清美術館→ただみ・ブナと川のミュージアム→
田子倉ダム→ふるさと館田子倉

講師：伊藤たまき氏(やないづ町立齋藤清美術館学芸員)
中野陽介氏(只見町役場地域創生課・ユネスコエコパーク推進係副主査)
随行講師：井出寿一氏(一般社団法人かわうちラボ事務局長)
展示案内：遠藤菜緒子氏(ブナセンター指導員<学芸専門員>)
雄勝祐太郎氏(ブナセンター指導員)
松崎大氏(ブナセンター指導員<学芸専門員>)
手塚スミ子氏(ブナセンター補助員)
石川貴大氏(ブナセンター指導員)

やないづ町立齋藤清美術館
(柳津町)

事務局・小林めぐみ

今日はご参加くださりましてありがとうございます。県立博物館の小林です。よろしくお願いたします。今回の奥会津ツアーは「小さな博物館がつなぐ大きな奥会津」というタイトルです。

この柳津町をスタートに只見町、明日は金山町、昭和村、そして三島町、それぞれの町の小さなミュージアムを訪ねて地域のことを教えていただきます。背景にあるのは奥会津の山の暮らし、只見川の電源開発。もちろんそれだけではなく、町、村ごとの魅力がありますし、課題もあります。今日、明日の奥会津ツアーではミュージアムを通して奥会津の良いところ、悪いところ、課題から魅力までを学んでいきたいと思っています。

随行講師として川内村からお越しいただいた井出さんです。川内村も阿武隈山地で山の暮らしを大切にしています。原発事故の後、2016年に戻られて、川内の良さをもう一度見直しながらコミュニティ作りもしていると思います。今日は柳津町と只見町に井出さんにご一緒させていただいて、お話を聞きながら奥会津と川内を交差させていきたいと思っています。

ここにいる方で自己紹介をお願いします。トップバッターは柳津町の齋藤清美術館学芸員の伊藤たまきさんです。

伊藤たまき

私たちがいる齋藤清美術館は奥会津の玄関口柳津町にある美術館で、私はそこで働いている者です。トップバッターとして齋藤清先生の作品を通して奥会津の原風景と電源開発を考えようということでお話しさせていただきます。よろしくお願いたします。

小林

川内から来ていただいた井出さんです。井出さん。一言お願いたします。

井出寿一

川内村の井出です。お招きいただきましてありがとうございます。みなさんの地域と変わらない川内村ですが、阿武隈高地もどんどん人がいなくなつて高齢化率も高くなりました。川内村とみなさんの地域を重ねてお話ししたいと思っています。よろしくお願いたします。

小林

「ご一緒くださる参加者のみなさんも、お前と一言いただけますか。」

参加者・阪下昭二郎

阪下と申します。金山町から参りました。出身は大阪です。会津に来て大体7年半で、金山町には2年半ぐらになります。農業を生業としていますが、県博の方々は漆を通して交流させてもらい、活動に関心を持って色々とお話しさせてもらっております。今回の取り組みに関しても興味を持ってツアーに参加させてもらいました。

参加者・原田洋二

原田と申します。横浜から朝5時起きで、鈍行で7時間かけて来ました。生まれが浪江町、高校まで浪江で、後は東京とか京都にいました。東京で出版社をやっていたのですが、今回の3・11で故郷の惨憺たる光景を見るに堪えず、浪江の特に文化の復興をやつていこうということ、会社を知り合いに預けて、今は主に文化復興の活動を色々やっています。かみさんの風当たりが強くて。今日ここに来るのも大変でした。浪江に博物館機能を有した施設をつくりたいと思つていまして、今回、小さい博物館が合わさると大きな力になるというコピーがとっても胸に刺さつたので、参加させていただきます。

参加者・木村千栄美

私ですか。こんにちは。はじめまして。プラスちゃんも1回アップして。私は会津若松市に住んでおります木村と申します。私の脇にいるパートナーは盲導犬のプラス君と言います。会津で田島町と若松の2頭しかいない盲導犬の1頭です。私は盲導犬ユーザー歴10年目になりました。私はマラソンをやっているのですが、3月の東京マラソン障がい者の部で完走してまいりました。マラソンと盲導犬のPR活動で色々歩かせてもらっています。おかげさまで、盲導犬が来て世界が広がりました。私は右目が少しだけ見えるのですが、本当にぼんやり露天風呂の中にいるような状況でございます。県立博物館に色々お世話になってありがとうございます。会津人でありながら会津のことを全く知らなかったの、いい機会に巡り会えまして、今日、明日、楽し

くお勉強させていただきたいと思つています。よろしくお願いたします。

中野陽介

只見町役場地域創生課のユネスコエコパーク推進係とブナセンター、本日ご案内する博物館施設を管理運営している組織、その二つを掛け持ちしている中野陽介と申します。よろしくお願いたします。私は出身が千葉で、この地域の出身じゃないですけど今年8年目で、まだまだ知らないことがたくさんあります。今回の機会に色々学ばせていただきたいと思つています。どうぞよろしくお願いたします。

齋藤理史

こんにちは。私は明日、からむし工芸博物館でご説明させていただく昭和村からむし振興室の齋藤と申します。私も今年の4月からからむし関係に携わるようになったもので、あまり詳しくなかったのですが、今回に向けて多少勉強させていただきましたので、頑張って説明したいと思つています。よろしくお願いたします。

小林

撮影にお2人入っています。スチールの岩波さんから一言お願いたします。

スタッフ・岩波友紀

岩波と言います。ツアーの撮影をさせていただきますのでよろしくお願いたします。僕は福島に来て6年目ぐらいです。生まれはこちらじゃなく、あまり関わりがなかったのです

大きな奥会津
小さな博物館
つながる

day 1 スタディツアー

が、震災があつてこちらに来て、写真を撮っています。その前は新聞社にいまして、全国紙なので、仙台の支局にいて東北を担当し、事件とかそんなのばかりじゃなく、日々の歳時記とかを撮っていて、福島にもよく来ていました。その頃は福島イコール会津みたいな感じ。今はほとんど浜とかそっちが中心ですけど、去年まで福島市にいたのですけど、今年から会津に引越して、こっちが大好きになった。よろしくお願いします。

小林

動画撮影は赤間さんに入っていたいでいます。

スタッフ・赤間政昭

前回の南相馬の「動物と震災」に引き続き2回目です。勉強不足で予備知識もあまり持っていないですが、今日と明日よろしくお願ひします。

小林

この場において共有して下さるみなさんはもちろんですが、ここに来られなかった方も共有していただきたいと思い記録誌を作ることにしています。撮影したものは、今後記録集、動画にまとめて多くの方に見ていただければと思っております。スタッフは後で名前をバスの中で紹介してください。

では、たまきさんお待たせしました。伊藤たまきさんから斎藤清美術館の目線でのお話をいただきます。よろしくお願ひいたします。

伊藤

スケッチを調べてみようと思つたのですけれど、今ちょっと見つからなくて制作年がよく分からないのですが。もしかしたら85年の段階でスケッチは描かれているのかもしれない。それだったらもしかしたら白洲次郎が関係あるのかもしれないですけども、よく分からない。要は電源開発とかそういうものを明らかに偲ばせる作品がなかなかないので悩んでいたところでした。

電力を起こして自然の美を破壊するに至れり

この画像は最近県立博物館さんで見せてもらった絵巻です。大瀧雨山という近代の画家の作品です。この方が只見川流域と大川流域を描いた全3巻からなる絵巻がある。すごく面白い絵巻です。一見日本画風と言つか、古い絵のように見えるのですけれど、ちょぼちょぼ電線なんか描いてあるなど、近代的な風景が日本画風の風景の中に出てくるのです。この画像は全3巻の中の本当に一部ですけど、ここ、分かりますか？大川流域の風景を描いた画巻の一部ですけど、アップにすると、これはどうも揚水ダムを描いている。調べてみたら、下郷町にある鶴沼川発電所を描いたのではないかと考えられる。この画巻が描かれたのが昭和8年、1933年です。この発電所はその2年前に稼働し始めている。稼働し始めたばかりの本当に初期のダムを描いている画巻だと思えるのです。この画巻は最後のところに詞書があります。この絵巻をどういう過程で描いたのかということを書いていのですが、最後の方に「此地をして交通を

ありがとうございます。トップバッターで荷が重いですけど、お話させていただくことになりました。チラシにも載っているのですが、これ、斎藤清の作品に描かれた只見川流域の景観から、只見川の原風景と電源開発を考える」という命題を与えていただいた。正直困つたのです。というのは、そもそも斎藤清さんの作品に電源開発、奥会津の開発を偲ばせる作品があるのかなと思つた時に思い浮かばなかったのと、テーマの中に「只見川の原風景」という言葉があるのですが、斎藤清の作品は「原風景」を描いたものなのかなという疑問があつたのです。一体どういう話をしたらいいのだろうかと思つた。最初にも言つたと考えていったわけです。最初にも言つたとおり、斎藤清先生の作品に本当にダムを描いているとか、あるいは、「只見特定地域総合開発計画」による風景の変遷を偲ばせるような作品があるのか。あつたらまさにトップバッターとしてふさわしいなと思つたのですけれど、ないのです。唯一というか、「え？なんでこれが唯一なの？」と思われるかもしれないですけど、この作品『民家町田』というタイトルですが、どこを描いたものか分かりますか？

事務局・川延安直

武相荘。

伊藤

そう。これは武相荘を描いている。武相荘と言われてピンとくる方、いらっしゃいますか。武相荘、武士の武に相手の相つて書く武相荘。

拓き、電力を起こして自然の美を破壊するに至れり」という文章が出てくる。交通、道が開いて、電力が流れていく、そういう過渡期の風景を描きつつ、そのことによって失われていく風景を惜しんでいるようなことが書いてあります。「今となつてはどんな変わつてしまつているので、この画巻が最後の記録になつている」みたいなことが書いてある。

斎藤先生にとっての原風景

近代化の中でどんどん会津の自然が変わつていく。その中であつてこういう作品を描いている。そういう画家が同時代にいる。では、会津出身の斎藤清先生はどうだったのかというと、これほどのはっきりした変化、「失われていく自然を描いている」、そういうのが



《民家町田》1987年

小林

白洲次郎ですね。

伊藤

そう。これは白洲次郎・正子夫妻が、戦前から白洲次郎が亡くなるまでずっと暮らしていたお家です。斎藤清先生はなぜこれを描いたのだろう。本当に謎の絵です。しかも制作年が1987年。この年つて斎藤先生が長く住んでいた鎌倉から会津に移つた年でもあるのですが、この2年前に白洲次郎さんは亡くなつている。この絵はスケッチがあるので、

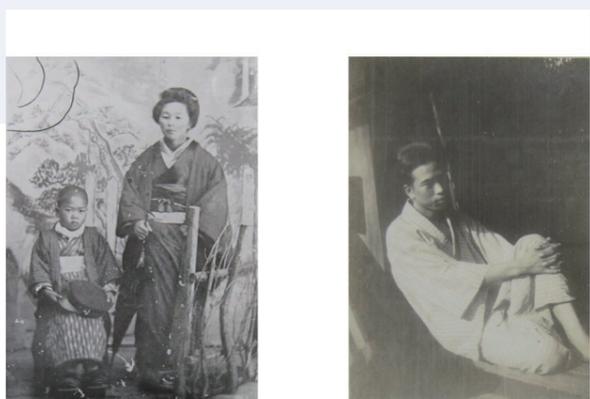
明らか作品はやっぱりないので。只見川の流域を描いている絵はあります。本当にまさに今窓から見えるこの風景。でも、こういうのを見ていると、失われつつある風景、原風景を描くという意図は見えづらいです。そもそもこういった絵が果たして斎藤先生にとつての原風景だったのかということも、実は疑問だつたりする。今回はそういったことを中心にお話をさせていただこうと思ひます。

生まれは会津坂下町

簡単に斎藤清の生涯を二紹介すると、明治40年、1907年会津坂下町に生まれた方です。独学で絵を学んで、木版画家として有名ですけど、木版画を手掛けるようになったのは1930年代後半からです。実は海外を中心に評価され活躍した画家です。きっかけとなつたのが戦後間もない1951年のサンパウロ・ピエンナーレでの受賞。これを皮切りに、アメリカをはじめとした欧米各国で個展、公開制作を行つて世界的に知られる画家になつていきます。色々海外に行つて風景をたくさん描き残しています。

確かに先生の生まれは会津坂下町。会津出身の画家です。でも、お家の事情があつて4歳の頃には会津を離れてしまう。北海道に行くのです。ずっと北海道で暮らして20歳過ぎぐらいまで北海道で看板屋を営んだりしながら生活して、青年期以降に絵の勉強をしたいと東京に移り住み、拠点を置きます。

1970年、63歳になつて鎌倉に移住します。鎌倉からこちら柳津町に移ってくるのが1987年、80歳の時です。やっとここで柳



津町、会津地域に戻つてきて、亡くなるまでこの地で過ごすことになりました。

会津で暮らしていたのは晩年の10年間だけ

つまり先生は会津出身ではあるのですが、会津で暮らしていたのは晩年の10年間だけです。会津で生まれたけど、ずっと生活をしていた方ではなかった。これは子どもの頃の写真です。隣がお母さんです。この写真は青年期のいい顔をされています。いい面構えです。北海道にいた時代の先生です。

これは東板橋時代のアトリエの写真です。こちらに写っている方は外国の方です。先生は欧米ですごく人気が出て、先生の板橋区



アトリエが海外の人にとってちょっととした観光地だった。で、こうして海外のお客さんが板橋のアトリエを訪ねて行った、そういう模様を撮った写真です。

先ほどたくさん海外に行かれたというお話をしましたけれども、この写真は全部海外での先生の様子です。フランス、アメリカ、メキシコ。他にもユーゴスラビア、韓国、中国にも行っています。そんなふうには暮らして、やっと会津に戻ってきたのが1987年。先ほどの『民家町田』が制作された、あの年です。この写真は先生が晩年を過ごした家ですけれども、今、斎藤清アトリエ館として公開されています。ここで最後の10年間を過ごされた。会津出身ですけど、会津に暮らしたのは10年間だけ。北海道、東京、鎌倉、そして、海

外にも行っている。要するに、会津出身だけれども、会津人という思いを先生は果たして抱いていたかというところ、とても希薄なのです。それは先生「自身も言葉で残している。例えば、こんなことを言っています。「それまでは父が北海道のあつちこつちに本籍を移し、どこが自分のふるさとかと思うことがあった。東京に出て鎌倉に移っても、どこかエトランゼ（外国人ですよね）」としての感覚が心の底に激のように残っていた。一体自分はどの県の人間なのだと自問することがあった。70歳になってやっと会津人にもなれた気がする」。自分は何人なのだろう、どこの県の人間なのだろうという思いをずっと抱えて仕事をされていたということがこの言葉からうかがわれます。故郷がない感覚を持っていた。

その先生が実は東京、鎌倉にいた時代から会津の風景を度々描いているのです。「会津の冬」ももちろん描いている。でも、一方で自分はこの県の人間なのか分らない。会津人であるのかさえ疑問に思っていた先生がなぜ会津の風景を描いたのだろう。というか、先生にとって会津の風景って何だったのだろうというのがやっぱり疑問として出てくるのです。

先生は「雪の厳しさを知らない自分が、会津の雪景色なんか描いていて申し訳ない」みたいなことも言っています。「申し訳ない」という言葉は、もうそれは会津の人間が言う言葉ではないと思う。会津人ではないという思いがあるから、そんな自分が会津の雪景色を描いていて申し訳ないという言葉になってくる。斎藤先生に、「会津は自分にとっての故郷」という思いがあったのか。先生がたく

さん描いている『会津の冬』や会津の四季の風景画は、果たして先生にとって『原風景』だったのか、どうしても疑問が私は湧いてしまうのです。

人物が小さいと 思いませんか

『会津の冬』には、一番有名な1970年から描かれるシリーズがありますが、これはその中の一作『会津の冬（23）柳津』です。この絵を見ていて気がつくことはありませんか？私はいつも疑問に思うのですけど、やけに人物が小さいと思いませんか。遠近法があるにしても、建物に比してやたら人物が小さくはかなげに描いてあるという気が私はするのです。なぜだろうと思うわけです。斎藤先



《会津の冬（23）柳津》1976年



《会津の冬 坂下》1938年頃



《会津の冬》1940年代

生は遠近法がちよつとあれだったのかな、なんて思いますが、ある美術史家の方が、「恩地孝四郎さんは清さんをモダンレアリストだと評していた」と言っています。恩地孝四郎って同時代に活躍した版画家さんですけど、その彼が「斎藤清をモダンレアリストだと言ってた」と。レアリストつまりリアリズムです。「斎藤清さんというのはリアリズムの方だよ」と恩地孝四郎さんは言っていたという。実際、斎藤清先生って本当にリアリストです。基本的に実際に自分が目にしたものしか描かない。ちゃんとスケッチを取って、そのスケッチを元に絵を描く方だった。そのスケッチも非常に正確で、独学とは思えない高い技術を持っている方です。本当にリアルに描く方です。斎藤清って基本的に。

雪の圧倒的な存在感

同じ『会津の冬』でも、初期（1930〜40年代）の『会津の冬』はどうでしょうか。人物の比率が正しいですよ。不自然さがありません。斎藤先生って、描こうと思えばちゃんとこうやって描く方です。

だから、あれは遠近法が云々とかそういう話じゃない。つまり、あの比率は多分わざと描いているのです。そうやって見てみると、1970年から始まる『会津の冬』になると人物の比率が全然違う。すごく小さく描かれていますよね。でも、この人物の小ささによって、逆に雪の圧倒的な存在感が強調されていると思います。斎藤先生が表現したかったのって、まさにこのことじゃないかと思うのです。自然の大きさと云うか、厳しさと言うか。人なんて押し潰してしまうような圧倒的な自然感を先生は表現したかったのではないかと

思う。『会津の冬』のシリーズを見てみると、こういう描き方がとても多くて、本当に山とか雪が積もる様子が大きく出ていて、その側にちっちゃい人がそつと添えられる、というのが1970年から始まる『会津の冬』の初期によく見られる表現です。『会津の冬』は1970年から描き始めますが、この年、実際の制作の拠点は鎌倉にまだ置いてあった。けれども会津にちよくちよく帰ってきてスケッチを取っている時期です。先生は鎌倉から会津に通って、会津の風景、雪の風景に圧倒されたと思うのです。そういう圧倒された感じがこの表現の中に出てくるのではないかと思われるのです。そういうのを見ても、暮らしている人の目線ではないと私は感じる。



だんだん雪の厳しさが わかってきたから

『会津の冬』がどんどん描かれ、『会津の冬』も71番目、かなり後半の、とても有名なこの作品『会津の冬（71）若松』の一つでは、ついに人影がなくなります。人がいなくなり、ただ、人がいなくなるけれども、人の気配はあるのです。例えば軒に下がるのれんによって、この中におそらく人がいる、人の生活が営まれているという気配を感じさせる表現になっていく。この絵も1987年、帰郷してきた年に描かれた絵です。斎藤先生はこの絵についてはわざわざ言葉を残していて、「この絵はとて自分でも気に入っているんだ。なぜかって言うと、この絵はとて寂し



《会津の冬（71）若松》1987年



《会津の冬(26)川井》 1977年

洗濯物が干してある

もう一つ、「会津の冬」には、みなさん「好きだ」と言う方が多いですけれど、洗濯物が干してある絵がとてもよく見られます。これは「会津の冬」だけじゃなくて、会津の他の風景画にもよく見られるのですけれど、洗濯物というののも考えてみるととても象徴的な気がします。雪がこんもり積もった中に小さく人が描かれている絵は、圧倒的な自然の存在感、そういうものに先生が圧倒されて描かれたのかなと思う。その中に、のれんもそうですけれど、こういう人の営みを象徴するようなものを描き加えることで、圧倒的な自然の中でも生きていく、暮らしている人々、したたかに営々と暮らし続けている人たち、自分なりにきれいなかった会津人のそういう強さというものを、この洗濯物に象徴させているという気がするのです。

異邦人として見た会津の風景

自分が結局持ち合やすことができなかった強さ、こんなに厳しい自然の中でもしたたかに生きてきた会津人の強さに対する畏敬の念、そういったものを象徴させているという気がとてもしています。今回「会津の冬」を中心にお話をしましたけれども、こういうものを見てみると、斎藤清先生の会津の絵は、確かに会津の実景を描いているし、実際スケッチを取って描写している絵ではあるけれど、でも、斎藤先生にとつてのリアルな故郷・会津の風景ではないような気がする。どちらかと言う

と異邦人として見た会津の風景という気がする。とすると、やはり「原風景」と言うのがためらわれちゃうという気がします。

普遍的な原風景

でも、だからこそ「原風景」なのかなという気もちょっとする。それは、斎藤先生が個人的に思う原風景というのではなくて、会津人ではない者の眼差しから見たからこそ生まれてくる普遍的な原風景、そういうものに昇華しているという気がします。「会津の冬」もそうですけれども、斎藤先生が描く一連の会津の風景画を見て、お客様の中に「温かい感じがする」「懐かしい感じがする」「とても郷愁を誘われる」ということをおっしゃる方がとても多い。でも、よく聞いてみると、その方たちって会津出身者じゃないです。やっぱり外側から来たお客様です。でも、外側から来たお客様がその会津の風景画を見て、懐かしいとか温かいと感じるのは、斎藤先生の絵の中に、個人的な原風景ではない、ある種、私たち日本人が抱く懐かしい郷愁を抱かせる何かがあるから。だからこそ斎藤先生の絵を見た時に、みなさんがそういう共通の感想を感じるのではないかと思うのです。それは斎藤先生が、会津生まれではあるけれども、実は会津で育った人間ではない、もしかしたらコンプレックスを斎藤先生は持っていたかもしれないけれども、そういう独特の目を持っていたからこそ、生まれた「原風景」と言えるのではないのかと思います。

これが皮切りの話になったかどうか。斎藤先生のリアルでありながら、実はリアルな原

げだろう。寂しげな感じがよく出ているだろう。通うのと住むのとでは全然違うんだ。会津に住むようになって、だんだん雪の厳しさがわかってきたから、あんな寂しげな絵になっただんじやないかな」と言っています。1987年、今まで会津に通っていたことから実際に会津に住むようになった年に初めて描かれた「会津の冬」。暮らすことによってその雪の厳しさ、圧倒されるだけじゃない、実際暮らして雪の厳しさが分かって、やっとそういう情感が表せる絵が描けるようになった。だから、自分はこの絵が気に入っている。そういうことを言っているような気がします。そこから見ても、会津人だけれども会津人ではない、異邦人としての自分というものが痛切に感じられる気が私にはします。

風景ではない。でも、だからこそ普遍的なイメージを持ったこの会津の風景というものを念頭に取っていただき、これから回ってくる奥会津の実際の原風景、今残っている風景、それがみなさんにもうまく反映されていたらいいなと思います。ありがとうございます。

小林

たまきさん、ありがとうございます。外からの目線だからこそその会津の風景。暮らしてみても初めて会津の本当の美、寂しさを描けたという。暮らすって何だろう。訪ねるだけとは違う暮らしの部分、その両方を行ったり来たりしたのが斎藤清さんだったのかも知れないですね。

伊藤

はい。そうですね。

小林

たまきさんはこの後も一緒にくださるので、バスの中でお話をお聞きできればと思います。この後、展示室を見たいと思います。あまり時間が十分じゃなくて恐縮ですがよろしくお願ひします。

バス内〱只見町

私どもの故郷は、双葉郡は、原発と共生してきた地域です

大きな奥会津
小さな博物館
かっなく



という意味ですが、かわうちラボラトリーの事務局長をしております。

この奥会津と川内村は似たような風景。文化、風習も会津と浜通りは違いますが、やはり高齢化率は非常に川内村も高くなっています。かつては32%ぐらいでしたが、今は65歳以上が占める高齢化率が45とか50%ぐらいになっています。私は富岡町、大熊町に通っていますが70歳前後の方しか戻っていない。ということ、この奥会津よりもかなり高齢化率が進んでいます。

新年度予算が 可決した日に地震が起きた

震災当時のお話を申し上げますと、2011年3月11日。今年はまだ8年目ですが、この年は統一地方選挙が行われていた年です。ですから、川内村も3月11日という日、ちょうど新年度予算が決まる年度の最終日に地震があった。新年度予算が可決した日に地震が起きた。3月議会定例会終了と同時に地震になった。

今から8年前、忘れもしません。震度6弱、時間にして3分から4分、ものすごい地震でございました。私どもは2階にある議場におつた。ちょうど議長が「これで、3月議会定例会を終了します」と。統一地方選挙だったので、「これでお別れ議会だね」ということで課長、幹部、議員のみなさんと湯本温泉で一献やる予定でしたが中止になった。

川内は阿武隈高地にあります。アイヌ語で「アブクマ」はなだらかな山地を指すそうです。地下が花崗岩で覆われているために土地が強

固です。ですから地震の被害もなかった。

「これから川内村に 避難したい」

次の日の朝、富岡町の今はもう亡くなられた遠藤勝也町長から電話が入りました。総務課の職員が「富岡の遠藤町長だよ」と。おはようございます。町長。昨日の地震はどうでしたか」と言っていると、「いや。そんなことではないんだ。井出君」と。我々双葉郡の町村長も課長も職員も連携していたので顔見知りだった。「いや、井出君。実は第一、第二原発、それぞれ電源が送られていない。冷却ポンプが作動していない。これから川内村に避難したい」ということでした。当時、川内村の人口は3,000人しかいなかった。富岡町は16,000人の人口がいましたから、「え？町長、何かあったのですか」と尋ねました。私も地震ばかり気にして、原発に電源が供給されていないという情報が全く分からなかった。

初めて避難を受け入れた

避難指示は3月12日の5時44分だったと思いますが、今考えてみますと、そういう発令がされたこともわからなくて、町長に確認したのです。「そうだったのですか。避難ですか。川内村に避難したいということであれば準備します」と申し上げた。こんなことを私の一存で決められませんから、すぐ遠藤雄幸村長に電話をしました。「今、富岡町長から電話があったので、受け入れてよろしいですね」「もちろんだ。俺のところにも電話があった。じゃ

000人が川内村に避難しました。それから、川内と富岡はお嫁に行った縁故関係もあるものから、民家にも大体3,000人から4,000人ぐらい避難していたでしょうか。

避難の長期化と放射線 という新たな問題

資料にもあるように3月12日、1号機の建屋が爆発しました。川内村の役場は第一原発から直線にして21kmぐらいありますが、「外にいたら、大きな音がしたよ」というぐらい。我々はそれを川内村役場のテレビで見た。それなら、富岡の町長が「これだったら富岡には戻れないな」ということで、最初は「1日か2日」と言っていた富岡町が「これだったらもう長期化になるな」と、初めて避難の長期化と放射線という新たな問題が巻き起こったのです。我々は原発立地町、うちは周辺ですが、双葉郡は仲良しこよしで職員同士も仲良しでしたが、原発があつて、周辺であっても我々は放射線と原発事故があるという想定がなかった。マイクロシーベルト、ベクレルという単位がどういうものかよく分からなかった。そういうことで放射線に対する不安が増してきた。

不安を拭うことが できません

当時、第一、第二を合わせると約1万人の双葉郡の人たちが雇用されていた。車と燃料のある方はどんどん遠くへ遠くへと避難した。



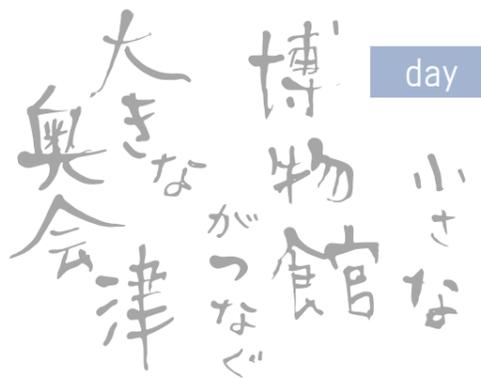
あ、土曜日なので、全職員を集める」ということになった。早速私も各課長に電話をしまして、7時半ぐらいまでに全職員を集めた。何度か言うように、川内村はほとんど地震の被害はなかったです。後から考えてみると、富岡、大熊、双葉町は液状化状態になって家は倒壊したのですが川内は花崗岩のために地下が強固だった。私も初めて避難を受け入れた。川内村に40年間勤めたのですが、原発避難以外はそんな避難を村内ですらしなかった。まして他町から避難民を受け入れる状況を私もよく分かりませんでした。「川内村にも4つの体育館があるから、まずそれからやろう」ということで、体育館の清掃をしているうちに富岡の一陣が来ました。富岡の三瓶副町長、今の副町長滝沢、当時は生活管理課の課長、災害対策本部の事

1号機に続いて3号機が爆発しました。4号機も燃料が入っていないのに建屋が爆発しました。ということになると、果たして川内村は20kmから30kmのところに富岡町民を受け入れまして、そして、川内村も20km圏内があるものから、やはり20km圏外に出して富岡町民と避難をしておたのですが、それでも不安を拭うことができません。3月も寒い時期の中で我々もいつかは死んじやうのかな、放射線で死んじやうのかなと、それぐらいの知識しか当時は持っていませんでした。

富岡町が川内村役場に來られた時は災害対策本部を毎日毎晩、私も総務課長の立場で村長と一緒に富岡町長、富岡の幹部と村長室で打合せ、職員同士で打合せをした。

どんどん毛布や野菜、 米が集まってきた

川内村は3,000人の穏やかな村だった。この奥会津も穏やかですよ。いざ避難民が来た時にどういう状況になるのか。原風景のままでは舵取りができないぐらい過酷でした。格納容器が爆発したら我々は死んじやうって、みんなそういう認識だった。若い職員も第一原発で働いている人の影響で、「原発が爆発するから、できるだけ300km以上離れて逃げろ」、そういった情報もあつて、実際に避難民の対応もしないで職場を放棄した若い職員も、約2割が3割ぐらいおつた。でも、そんなことでもよくて、とにかく今いる人になんかどうやって食料を炊いて生活させるか。村民から米、野菜を集めて、婦人会の人の炊き出しも役場の前で頼みました。ガス釜が10個以上、



外で炊き出しして、出来上がった順からおにぎりにして各避難所に配る。ですから富岡町民の方にも迷惑をかけた。食料も行き渡らず、3月というどうしてもまだまだ寒い。防災行政無線で「川内村民のみなさん、どうかお米と毛布などあつたら、各集会場に」とお願いしたら、どんどん毛布や野菜、米が集まってきた。12日から16日は本当に過酷だったのですが、3月15日になると当時民主党政権の枝野官房長官が、テレビで「20kmから30kmは屋内避難にします。外にいる人は中に入ってください。エアコンと窓は止めてください」と。

「ベントしますから」

ベントという言葉は今では分かりませんが。当時は分からなかったですよ。ベントしますから」ということになった。実は富岡町民が川内村に來られた時に、原発の情報は国や県からはただ一度も入ってこなかったです。富岡町から12,000人ぐらい避難していた、川内村もまだ3,000人おつた。ですが、こういった情報が富岡町長、川内村長にも入ってこない。ただ1回だけ、当時福島第二原発の副所長から、3月12日の建屋が爆発する1時間前でしたが、初めてここで説明を私も町長や村長と一緒に聞きました。「今格納容器は冷却ポンプに電源が供給できない状況で、いずれベントするようになります。私はベントという言葉はそこで初めて知った。「ベントって何ですか」と質問した。「格納容器を開けることだ。圧力を外に漏らすことだ」とわかった。3月15日午前11時、枝野官房長官がそういう発言をされて、「もう富岡の町

津波と福島第一原発事故と視察 (2012.3.29実施)



14mを超える津波。全電源喪失による原子炉のメルト・ダウンそして水素爆発



2012年3月29日に川内村執行部 現地見学(免震重要棟で社員を激励する村長)

民に炊き出しはできない」そして「どこに避難しようか」となった。

避難先は 郡山のビッグパレット

福島県災害対策本部では、富岡、川内は会津地方に逃げなさい、避難しなさいという指示だったのです。でも、車を持っておられない方、お年を召された方が結構いた。マイクロバスが富岡、川内で16台ありましたが、当然1回で済むものではありません。2回から3回送迎しなければならぬ状況だったので、私も村長と町長に「会津若松までこの状態では行くことはできません」と伝えました。

「ビッグパレットがある。郡山のビッグパレットが。あそこに行きましょう」

「被災して建物に入れないようだ」

「駐車場でもいいじゃないですか。いつ避難するかと車で寝泊まりしている方がいます」「じゃあ、そうしよう」ということになりました。

ビッグパレットの館長さんが、「被災していてもいいから、富岡町、川内村の方は郡山のビッグパレットに来なさい」ということになって、初めて郡山のビッグパレットが決まった。3月15日の夜9時頃です。

夜間だったので、防災行政無線で「これから川内村、富岡町は二次避難をいたします。避難先は郡山のビッグパレットです。車のある方は郡山ビッグパレットに向かってください。ない方は避難所もしくは最寄りの集会所に朝9時までに簡単な支度を持って待っていてください」ということになり、朝9時ぐらいか

ら避難を始めました。

16台のマイクロバス、スクールバスがありましたから、それで川内から郡山へ、時間にして片道1時間半、普通なら3時間ぐらいで戻ってこられる距離だったのですが、当時は双葉郡からの避難者はおそらく放射能に侵されているだろうとガイガーカウンターでスクリーニングをした。そのためにバスがなかなか戻って来ないのです。1回目が来たのがもう3時頃だった。2回、3回と往復して、やっと避難が終わったのは夜の9時頃でした。

富岡町長と川内村長、役場職員の課長クラスが役場において、「じゃあ、我々も郡山に行く」ということになった。当時、避難したくても避難できない人が川内村でも約50人いた。昼間のうちにチェックしておいたのです。どういう方かという、家で寝たきりの人、体が不自由な人は避難できないから、「家にいるわ」となった。家畜を飼っている方も「俺は避難しない。動物と一緒にだ。家畜と一緒にだ」ということで、約50人いた。

「私は川内村に残りますから」

役場に「これから川内村役場は富岡町と一緒にビッグパレットに避難します。そして、連絡先はここです」と玄関5ヶ所に大きな表示をして、「じゃあ、いざ避難」という時に、村長に申し上げた。「私は川内村に残りますから。避難できない村民、町民のために。外を歩いてきてかなり汚れていますから」と。私はその時点で死を覚悟していましたから、当然私も放射能に侵されているという感覚で

なった時にどうだろうか。

初めて除染を

放射能の影響、失業者の増加が今も続いている状況です。でも、川内村は20kmから30kmで、運良く6ヶ月ぐらい経って川内村は線量が低そうだ、これ以上原発の事故が起きないということになって、川内村の緊急時避難準備区域は20kmから30kmを解除しようという動きがあった。村長も「じゃあ、来年の3月に住民を戻そう」ということになった。川内村は帰村宣言をして翌3月には行政が戻って、4月に1年で川内村の行政が戻った。

私はこの時点で後2年ありましたから、除染と復興再生をしようと復興対策課を作った。私も初めて除染をやらせてもらいました。1戸の家に約700万かかっています。川内村は1、2000世帯ほどあるのですが、1年間で除染を済ませて、そして小中学校、公共施設の除染をしながらさらに農地除染まで行いました。でも、仮置き場をどうするかという問題があった。当時、細野環境大臣は「仮置き場は3年で中間貯蔵に持っていく」ということでしたが、結局6年から7年間かかった。

天皇后陛下も

もう一つは企業の誘致です。私は40年間役場にいたのですが、行政で企業を誘致したということとはなかったのですが、戻った年の1年で三つの企業を誘致した。それからいろいろなインフラを1年でほぼ完工した。今は上皇になりましたが、天皇后陛下下も

あったので、平気でした。「これが殉職という

ものなのかな」と自分でも考えました。「おまえが行かないで、ビッグパレットがどうなっているかわかるか。村に残るのは違う人に任せて、おまえも一緒にビッグパレットに行け」と村長に言われて、泣き泣き庁内を出て、私も村長を自宅に送り届けると、私一人になったのですが郡山までの道中は涙がとまらないほど悔しかったです。ここで休憩ですね。

小林

休憩します。井出さん、ありがとうございました。郡山からのお話をまた引き続きこの後、お聞きしたいと思います。ここでちょっと5分ほど休憩を取ります。

当時は防災計画もなく

井出

資料に川内村の地図が載っています。金山町に今来ていますが、川内村も本当に穏やかだったのです。現在は穏やかな農村風景が工事車両と作業員でこった返しになっています。住民はまだまだ戻っていないのです。そんなことで郡山に避難したのですが、資料に富岡町民の避難の様子が載っています。

川内と富岡には小野・富岡線という県道しかなかった。これが大動脈でした。当時は防災計画もなく、我々は即決で決めなくちゃならなかった。何事も富岡町と打合せをしながら即決で。浪江町の方も今日同乗されておりますが、浪江町も大変だったと思います。安全・安心だった原発の事故がどうい影響を及ぼしたか。この奥会津がこういうことに

山菜はコシアブラが出やすいって、ニユースになる時があります。

井出

会津もやっぱり出るのですね。福島県内は今もきのこについては売買禁止だと思っています。会津地方であっても。香茸ってみなさん分かりますか。

小林

シシタケ。

川内村の米も今は安心・安全に

井出

会津地方ではシシタケなのです。これが本当においしいのですが、まだ食べられなくてつらい。食品検査所がないと生活できない状況です。震災前はこんなことなかったのです。私は70aぐらいそばを作っています。今年

は長雨もあったのですがなんとか収穫しました。川内村はこの会津地方と同じように福島県の奨励品種である「会津のかおり」を作っております。私も震災前から趣味でそば打ちをやっていますので、いつか川内村に来られた時はそばを私が打ってさしあげます。避難して1年間さすがに農業はしなかったのですが、2年目から水稲の作付けが始まりました。全袋検査をやって震災2年目は実際に2%ぐらい100ベクレルを超えるものがあったのですが、3年目からは全部が基準値以下。川内村の米も今は安心・安全に食べることができ、震災前と同じように通常ルートで販売してお



ります。川内村の米もおいしいです。会津の米はどうでしょうか。

小林

おいしいですよ。

井出

奥会津の米おいしいですよ。川内村の農業再生に向けた取り組みもいろいろやっています。川内村は私が小さい頃は低温で5月下旬にたまに寒さが厳しくて遅霜が降ります。果樹の芽が枯れてしまう。私が小さい頃には果樹は考えられなかったのですが、こちらは何の果樹があるのでしょうか。

小林

りんごとか柿ですね。

ワイナリーを作ろう

井出

りんご、柿は霜にも強いのですかね。川内村では約11,000本のワインぶどうの栽培を3年前から新たな取り組みとして始めたのです。2年後にはワインの醸造所も作る、ワイナリーを作ろうという考えも持っています。また新たな魅力もできたかなと思っています。

もう一つは再生可能エネルギーです。この地方も東北電力ですが、東京電力の水力発電所もありますね。私どもの地方は東北電力の管轄でありながら、第一、第二、広野火力で、なんと1,340万kwもの電気を作って東京に輸出していたのです。東京に輸出している関係で電源交付金とか東京電力を納税者とし

て核燃料税というものがある。昭和46年に初めて第一原発の1号機が運転される前は、福島の子ベツトと言われ所得が一番低く、産業もなければ観光地もない。こちら会津は観光地があるので、交流人口の拡大は昔からあったと思いますが、我々の地域は原発ができる前は本当に観光もなかった。ですから原発が双葉地方の発展に大きな力になっていたことは間違いありません。

1万人いた働く人がいなくなっちゃいましたから

ですが、今は原発事故で第一原発は1号機から6号機まで廃炉です。そして、7号機、8号機についても計画停止になりました。第二原発は4号機まであって1基が110万wですから、440万kw、これも東京電力が今廃炉を検討していますから、第一、第二すべて廃炉になる。残っているのは広野火力発電所だけです。そうしますと、第一、第二で1万人いた働く人がいなくなっちゃいましたから、これからどうしようかということが課題です。第一、第二原発の送電線が関東圏まで山を通過して大型鉄塔で送られています。電気は今ほとんど送られていませんから、それを福島県が再生可能なエネルギーにしようという取り組みを行っています。

阿武隈高地に約100基もの風力発電が

再生可能なエネルギーは何かと言うと一つ

います。

まさしく奥会津のこの地域と重ね合わせてみたい、これからどうなるのか私は興味を持っています。連携していかないと税収は上がらない。地方交付税に頼るわけにもいかないということになると最終的には合併しかないという、この奥会津地方と同じ環境になると思います。

原発ができる前の状況に戻った

こんなところが今日のお話です。この地方と照らし合わせて言えることは、人口が少なくなつて原発ができる前の状況に戻った。限界集落、集落がなくなる状況が川内村においてもすぐそこまで来ています。日本全国がこういう状況の中にあつて、国は新たな過疎地域特有の地方創生という言葉で何かをやるうとしていますが、活性化を生み出すのはなかなか難しい。

福島県立博物館で5町村を回るこうした連携をしている、こういうのも一つのきっかけだと思います。我々の地域もこの地方も黙っていても発展がないと思います。交流人口の拡大を期待しながら何ができるか。今日は色々な文化財、博物館巡りをする。こういうのは一つの手だと私は思っています。参加させていただきありがとうございます。

何かご質問があれば。

小林

井出さん、ありがとうございます。一つお聞きしていいですか。帰村されてからの色々

は太陽光です。原発1基が110万km、太陽光が100haで10万kwぐらいなので、足元にも及ばないのですが。それでも送電線を使うとうとうと、川内も含めて田村、都路、葛尾、飯館、いわきまで含めて阿武隈高地に約100基もの風力発電ができます。一基が4300kw、4.3メガで、塔の高さも布引だと60mぐらいですが、こは100mです。ブレード3枚で回っている。ブレードも20から40mが今日本にある風力ですが、これがなんと60mですから最大120mの直径。風で回して電気を作つて、また首都圏に送ろうという予定でございます。原発に代わる再生可能エネルギー、これでもやはり雇用はまだまだです。

かえるマラソン

川内は「川内の郷かえるマラソン大会」をやっています。私は職員時代に埼玉県で語り部としてお話ししたことがあるのです。その時、県庁の職員が「埼玉県でも実は何か川内村を応援したい」と。そこで「埼玉県庁の公務員ランナー川内優輝選手、同じ川内だね」ということで、川内優輝選手を川内村にお呼びしました。かえるマラソン大会も今年で4回目が終わりました、来年5回目になります。事務局長に就任したかわうちラポで来年4月29日にマラソン大会をやりま。

人口が12,000しか戻っていない

資料の最後のページですが、住民意向調

な取り組みを教えてくださいましたが、戻る方が少ない状況の中で、井出さんが川内村の将来を考える時に一番大切にしたいと思つていらつしやることは何ですか。

井出

「質問ありがとうございます。私は一番人と人のつながりを大切にしていきたいと思っています。人と人の交流を大事にしたい。来る者拒まず、私は双葉地方に一人でも多く来ていただきたいと思っています。こういった連携で奥会津のみなさんとまた行つたり来たりできればいいなと思っています。」

小林

ありがとうございます。この中にいらつしやる行政職ということで齋藤さん。奥会津で合併の話は出ていましたか。どうでしょう。

齋藤

合併話はありました。南会津以外だと昭和、金山、三島、柳津、会津坂下。合併しようというところで協議会が立ち上がったのです。平成10何年だったか。震災前です。平成の大合併をみんなやっていた同じ頃。結果的に「破算になったのですけれども、当時合併に向けて各町村から職員を出して事務局をつくっていました。」

昭和に関しては、住民から「昭和はただでさえ奥地にあるので、5町村で合併するとそれこそ僻地扱いになって、どうしようもなくなる。合併には反対だ」という声が上がりました。村の総意としては、しないという話をせざるを得ない。それから、柳津との関係が

査に基づく帰還者予測によると2011年の3月11日時点で双葉郡は75,000人の人口があつた。現在の住民基本台帳は約12,000人減っています。住所は元の川内、富岡、大熊、双葉で今約63,000の人口です。戻っている帰還者については今年7月1日現在で各町村にお電話をして聞いたのですが、一番多いのが広野町で4,100人、楢葉町が3,600人、川内村が2,100人です。大熊町が66人、浪江が1,057人、合わせて12,000人ぐらいです。元々7,6000人あつた人口が12,000しか戻っていない。「これから戻る。戻りたい」という意向を踏まえて計算してみますと双葉郡は戻っても17,000人ぐらいだろうと。

合併の議論が一度もなかった

平成の大合併で双葉郡8町村は合併の議論が一度もなかった。田島を含めて南会津は合併したのですが、こちら奥会津は合併しなかった。どうしてなのか聞きたい。合併協議会があつたかどうか聞きたいです。

双葉郡に今は復興予算とか除染の予算が入つて、単独で町村維持は可能ですが、1年半ぐらい経つと10年です。そうすると、いわきとか郡山、住所を置いてあるところに住所を移しなさいという行政指導がある。富岡町はおそらく16,000人あつた人口が2,000人まで戻らない。特に大熊町、双葉町は1000人、200人では行政が成り立たないということで、どこかで市町村連携とか合併が言われると思

うまくいかなかったような。

井出

私の記憶だと平成16年から18年だったと思いますが、三位一体の改革、国がそういう改革を小泉内閣の時に打ち出した。合併にはやっぱりアメとムチがあつて、合併しないと地方交付税を減らすというムチ、合併すると公共施設をつくつた場合には補助金を出すというアメがあつた。

また、合併すると中心地がどんどん活性化して、周囲が下がる。齋藤さん、こういうことで合併しなかったのではないですか。この地方は中心地にならない、周囲として廃れるということだったのでは。

齋藤

そうですね。昭和村的にはそうです。会津坂下が一番栄えていますから、もしうまく行つていれば基本的には中心は坂下。集まると市になれるという特例があつた。

井出

多分条件としては3万人を超えると市なのですが、合併した場合については、当時の3万人の地方自治法は撤廃されました。双葉地方8町村は、先ほども申し上げたように、町村長の間でも議会議長の間でも一度も合併の議論がなかった。やっぱり原発があつたからです。

齋藤

双葉は交付税をもらつていなかった。



井出 そう。当時もらつていなかったのが浪江と葛尾と川内。こは地方交付税交付団体でしたが他の5町はすべて地方交付税不交付だった。だから川内とか葛尾さんはお嫁さんにももらつていただけなかった。みにくいアヒルの子と私は表現しているのですが。

小林

いやいや。自主独立じゃないですか。

合併しなかったのも一つの選択肢

井出

奥会津5町村が合併しなかったのも一つの選択肢だったかもしれません。昭和村もそうだと思います。合併していると町が大きくなつて、隅々まで行政の目が届かない。

こんなことを言うのは申し訳ないのですが、田村市は船引を中心に常葉町と滝根町と大越町と都路村が合併したのです。川内の隣に都路村があるので、「川内さんは合併しなくてよかったよ。都路は船引ばかりよくなつちゃつて、都路は川内よりずっと行政の恩恵が悪い」と都路村の人が言っておられます。

小林

震災の時に宮城、岩手でも合併したエリアの外れの地域まで行政が行き届かなくて、しばらく取り残されてしまったということがありましたよね。

井出



館長
イノシ

イノシ

イノシ

イノシ

イノシ

イノシ

イノシ

金
たみ
ブナ
の
森
の

EXIT

イノシ

平成の大合併、昭和の大合併も明治の大合併もあったのですが、昭和でも平成でも、合併によって中心地が良くなって、他の隅々にある自治体は行政の恩恵が悪くなるみたいですよ。齋藤さんどうもありがとうございます。

小林

はい。ありがとうございます。多分メリット、デメリットがあって、何を選択するかという時に自分たちの村、町、市をどう捉えているかということなのかと思います。そんな時にミュージアムも一つ役割を果たすでしょう。小さい館が連携していくことで個性が際立ったまま繋がることもあると思います。

復興のためには文化が大事

原田

僕は震災以降の各自治体の復興はあまりよくわからないんですけど、とにかく復興のためには文化が大事。確か中越の地震の時もそうでした。山古志村の村長さん、後の参議院議員の方が文化で復興というのを盛んにおっしゃって、本もありました。それを読んで文化はやっぱり大事だなと思いました。

今の井出さんのお話もそうですけど、やっぱり行政の復興もまだ経済主体の復興という印象がすごくある。フランスは文化を政策、国策に出す。しかも、地域に主導権をどんどん振っていく国策です。やっぱり文化をもっと前面に出して、文化を経済発展の手段とする。僕はそれが今回の3・11の教訓じゃないかと思うのです。

只見町のブナ林を保護したい

指導員・遠藤菜緒子

「ご案内させていただきます。「ただみ・ブナと川のミュージアム」は只見町が直接運営していただいて、私たちの運営組織は「只見町ブナセンター」という名前です。只見町の自然と自然を利用した人の暮らしを展示で紹介しています。

このミュージアムがどのようにして出来上がったのか。建物ではなく組織の話です。奥会津地方でもかつてはブナ林の伐採がかなり行われていました。それが1960年代でした。それから「ブナを伐ると洪水が起こる、水害が起こるのではないか」と町の人たちが噂し始めるようになり、ブナの保護運動を徐々に始めるようになりました。保護活動が具体的に becoming するのは1990年代に入ってから、随分遅くなってからでした。1990年代後半には民間による大規模な署名活動が行われましたが、決め手がない中で京都大学の名誉教授であった河野昭一先生に声をかけました。この方は植物学者で、全国各地でブナ林の保護活動に携わった方です。そして、協力の要請を快く引き受けてくださいました。

奥会津のブナの森は世界の宝

そして只見町でも河野先生に依頼し、この町のブナ林の総合学術調査研究が行われました。科学的な調査の結果、世界に誇るブナ林

井出

はい。私もそう思います。私は行政を離れたのですが、やっぱり何かを仕掛けないと。この地方も、齋藤さんそうでしょう、何かを仕掛けないといけない。やっぱり黙っていてもどんだん地方、地域が衰退していく。繰り返しますが、今回の博物館でのこういった初めての企画、こういったところにみなさんが参加して、参加した人がどう思うかがわかっただけでもいいですね。

小林

そうですね。そう思います。

井出

仕掛けないと衰退する。仕掛けて現状維持するのが精々。地域活性化というのは来る者拒まず、やりたいことをどんどんやったほうがいい。

小林

ありがとうございます。只見の中心部に入っただけでいいです。間もなくブナと川のミュージアムに着きます。ここで井出さんのお話を一旦終わらせていただきます。2011年の3月11日当日からのお話を聞かせていただき、その場面に目も浮かぶようでした。井出さん、ありがとうございました。

ただみ・ブナと川のミュージアム(只見町)

であることが証明され、また世界ブナサミットをこの町で2回開催し、情報発信をしました。そこで、この奥会津のブナの森は世界の宝であると、河野昭一先生が言ってくださいました。町もこれを受け、ブナの保護活動を進め、地域の自然を生かしたまちづくりを始めたわけです。その中で生まれたのがこの只見町ブナセンターです。ここは今、町の自然環境を守る中心地、ユネスコエコパークの推進拠点になっていて、ブナを核としたまちづくりの中心になっています。河野先生はここブナと川のミュージアムの初代館長になり、私たちが引き継いでやっています。

阪下

提言化されて保護林に指定されたのは、運動が始まった後ですか。

遠藤

2007年に奥会津森林生態系保護地域に指定されることになり、国有林全体の保護が成ることになったわけです。よろしいですか。他に何かございますか。

では、展示室内を見て行きます。館内の展示物の撮影はご遠慮いただいていますので、ご協力をお願いします。ここが常設展示の入り口です。次はこの緒勝が案内します。

雪食地形

指導員・緒勝祐太郎

常設展示室入り口パネルを見ていただきながら説明いたします。ここでは只見町の自然環境と野生動物、昆虫、加えて2階には民具な

自然首都・只見のブナ林



日本のブナの分布
■ ブナの分布
■ わずかにブナが分布
■ 只見町
■ 福島県

ブナは、北半球の北温帯を代表する高木広葉樹です。世界には約10種類のブナが知られていますが、顕著な大規模な森林によって天然のブナの分布は、その大半が失われてしまいました。

日本列島は、世界でもっとも原始的なブナ林を有している地域です。なかでも、只見のブナは、その規模、自然度の高さ、日本の気候では、日本国内でも、トップレベルと評価されています。ブナの樹は、大木といふから1500メートルの山脈にまで広く分布し、「緑の山」(只見町)と「奥会津森林生態系保護地域」内のブナの天然林は、4つのクワールにもよります。

ブナの森には、多量な樹に適合した数多くの日本固有種の植物や、イヌワシ、クマカサなどの猛禽類、クロオオヒツコソリなどの希少動物が生息し、豊かな野生生態系が形成されています。

只見町は、日本の自然の中心地、「自然首都・只見」を宣言しています。さあ、みんなで、豊かな只見のブナの森を見に行きましょう。



でも展示しております。簡単に只見の自然環境をご説明いたします。只見町の特徴は国内のみならず世界有数の豪雪地帯、その多雪環境です。今、企画展で只見の地形と地質をやっています。非常にもろい緑色凝灰岩の地層が全体にあり、そうした地質と地形、多雪環境が組み合わさって特徴的な景観を生み出しています。雪食地形は、山の急斜面に雪が積もって雪崩が起き、それによって表層部分が削り取られて植物が定着しにくい環境になっています。また、山地斜面の岩肌がむき出しになっている場所は、専門用語でアバラランチ・シュートと言います。

地形環境によって様々な植生

雪食地形、急峻な山岳地帯では特徴的な植生が見られます。一つ目は植物が生育しにくい斜面でミヤマナラやアブラチャンなど斜面に張り付くように生育する植物があります。一方で尾根の尖った部分には常緑針葉樹のキタゴヨウが立ち並ぶように生育しています。斜面から下の平坦部になるとようやくブナが見られ、ブナ林を形成します。集落の近くには植栽したスギ林などもあります。山岳地帯の只見の特徴はこういった地形に応じて、様々な植生が見られるということです。只見町内には伊南川と只見川が流れています。そちらの河川沿いでは溪畔林といひ主にヤナギ類から構成される森林があります。たくさん沢があります。沢沿いには主にトチノキやサワグルミからなる溪畔林が形成されます。只見を代表するのはやはりブナ林で、奥会津地域

の森林生態系保護地域の中に4万haほどブナの天然林がございます。

原田

それは町のものでしょうか、国有林ですか。

緒勝

国有林です。越後三山只見国定公園も設置されており、この辺りの天然林は4万ha。

井出寿一

川内にもブナ林がある。地図パネルのここは川内村です。

緒勝

国内に分布するブナには2種類あって、日本海に分布しているのがこのブナで、太平洋側はイヌブナ、また別の種類が分布しています。ブナは日本海沿いの雪の多い環境に適して生育している。ここまで自然環境の概要を説明しました。質問などございましたら。

井出

ここの標高はどのぐらいですか。

緒勝

ここは3,740mぐらいです。奥会津では、ブナは標高1,500mぐらいまで分布しています。

常設展示は生き物を中心に展示しております。昆虫の標本は、ブナ林が多いので、ブナを食べるカミキリムシ、クワガタムシ、ブナ林に生息しているゴキブリの仲間があります。

小林
ゴキブリですか。

緒勝
ブナの立ち枯れに付くサルノコシカケというきのこがあるのですが、そうしたきのこを食べる昆虫がいます。只見にはそういった普段あまり目にするのではない昆虫も生息しています。只見出身で昆虫採集、調査をされてきた方に標本を寄贈していただき、展示しています。

また奥に移動していただきます。只見町の自然環境を模したジオラマで只見町の地形を感じてもらえる構造になっています。森の中にいる動植物を見ていただけるように撮影画像を置いてあります。動物や鳥は自然環境の中にいますと一般の人は見つけづらいですから。カルガモ、コガモ、アカゲラ、コゲラ、シジュウカラ、セキレイ、いっぱいありまね。オオルリやカワセミ、ヤマセミ。

こちらの剥製は町の人がお持ちいただいたものも展示しています。ですから同じような鳥や動物の剥製がありますが、みんなちよつと顔が違っていてユーモラスな顔をしたものもあります。

水槽の中ではイワナを飼育しています。

人間と自然との調和的な関係

指導員・松崎大

これまで主に只見町の自然環境に重点を置いて説明いたしました。ユネスコエコパークは自然環境だけを保護するのではなくて、人

日本社会の矛盾を「ご覧になるいい機会だ」と思います。

こんなところで説明を終わらせていただきます。10分後エントランスにお集まりください。

バスと田子倉ダム

小林

ここから田子倉ダムのことを松崎さんにお聞きしつつダムに向かいます。では、松崎さん、よろしくお願ひします。

松崎

引き続きご説明させていただきます。なぜ奥会津地域にこれだけのダムが開発されるようになったのか、やはり自然環境が影響しています。ダムは大量の水と水が落下する高低差を必要とする設備です。奥会津は非常に広い山が連なり、更に只見川を主流とする広大な川が流れています。戦後だけではなく戦前にもダム開発は行われておりました。みなさま、本日は三島町に寄られましたか。

小林

三島は明日です。

「金は一時、土は万年の宝」

松崎

明日ですか。そちらでまた詳しいご説明があるかと思いますが、戦前に宮下発電所が開発されておりました。戦時中のエネルギー不

間と自然との調和的な関係を築くことを理念に掲げております。2階の展示からは、只見町の人々が歴史的にどのように自然と共生し、自然から恩恵を受けてきたのかを説明する展示になっています。

只見町は豪雪地帯であり、雪を利用した伝統的技術が残されています。例えば、3月下旬から4月の中旬にかけて雪山に行き、木材の伐採などを行い山から下ろしてくる「春木山」という風習があります。その頃になると雪が固く締まり、雪の上を簡単に歩ける環境ができあがる。そうした雪の環境を利用して様々な木材を安全に下まで下ろしていく。日常生活において、雪があるから大変なところもあると思うのですが、逆に雪を利用して人々の生活に役立てる、そうした知恵が生まれま

した。ではまた奥に進んでいただきます。

自然物の採取

みなさま、奥会津の各町村を回られてきました。それでおわかりになると思いますが、奥会津は平らな土地が少なく、山、川に囲まれています。ということは、日本の他の農村地域のようにお米を作って生産、販売するだけでは生計が成り立たない場合があります。お米の栽培面積自体が非常に限られています。そうしたところの人々がどのように生計を立てていたのかというと、山菜など山からの自然物の採取が大きな意味を持っておりました。

特に奥会津全体で言えることですが、ゼンマイをみなさんご存じですか。山の絶壁に近いような環境に生える植物ですけれど、その

ゼンマイを採取して乾燥させて揉み込み、乾燥物として販売していた。それが奥会津の人々にとっては非常に大きな生業になっておりました。只見でも盛んで、5月ぐらいの初春の時期になると山に泊まって、「泊まりやま」という山に住み込みでゼンマイを採取して揉み込んでいくことも行われていたそうです。そうしたこともあって、只見町で出るゼンマイの量と価格によって、ある程度奥会津地域のゼンマイ価格が決まったと考えられております。奥会津の人々は豪雪地帯の地形、自然環境に応じて持続的に生業を営んできたと言えます。ただし、こうした伝統的な形態、文化が近代、高度経済成長期に急速に失われていった。そうした事例が次のダムの説明になります。

また移動していただきます。

只見川の電源開発計画

田子倉ダムの説明はみなさんとバスに同乗して説明させていただきます。この場ではこちらの写真をご覧いただきます。ここが現在の田子倉ダムの場所、旧田子倉集落です。この集落も先ほど紹介したように山菜、ゼンマイ採りで有名な集落でした。この集落で戦後、初期の段階から只見川の電源開発計画が持ち上がり、ダム開発が奥会津地域でかなり進められていきます。その結果、田子倉集落はダムの底に沈んでいきました。奥会津地域は伝統的な人々の生活が見える地域であると同時に、ダム開発に代表される近代化の結果も非常に残されている地域だと言えます。非常に相反したものが混ざりあっている地域で、

一概に評価するのは大変難しいですが、結果として日本中いたるところでダムが開発されていきました。日本の高度経済成長と近代化を支えたところにダム開発の歴史があったと考えられます。今見えてきたのが田子倉ダムの入り口です。

小林

巨大ですね。

複雑なダム開発にまつわる論議

松崎

非常に巨大です。これはもう第二の自然と呼んでいた研究者もいた。これを人智で造る。私はその映像を見たことがあります。真冬の豪雪の中、事故や反対派の人の影響もある中なりふり構わず開発を進めていく。賛否両論あるかと思いますが、当時の人々にとってはダムができることでエネルギーが確保される家の中も明るくなり、豊かな生活を送れるという前向きな目的がある。映像の中でナレーターの方が「これでこの集落は救われ、日本

社会はどんどん発展していく」と語る。明るい、楽観的な時代の趨勢がございました。複雑なダム開発にまつわる論議は色々な思考のきっかけになると思います。また、そうした集中的開発が福島県では原発の問題につながっていくところがあるように思います。

奥会津は2011年の震災の影響で山林の放射線量がかなり増えてしまいました。これまでこの、山菜を採取して、奥会津以外の地域の人々に送って関係を築いていた人たちが



山菜を採ることをやめて、関係性も非常に閉塞していった。奥会津は震災の文脈では語られるところは少ないですが、そうした震災の影響を受けました。震災に連なる開発の論議が非常に大きく影響を与えていた地域でもあると思います。

自然との関わり方を考える糸口に

実は沖縄でもアメリカの占領統治から日本に復帰していく時にダム開発を行っています。ダム開発の後で沖縄海洋博を行って日本に返還される。日本社会では、開発によって一人前になると言いますが、ダムがあることで先に進んでいくという考えが普遍的に見られたのではないかと私は思います。奥会津地域は日本社会全体のダム開発、自然との関わり方を考える糸口になると私は考えております。これだけ高いところにあのダムを造っている。山を縫うように電柱が立てられている。なかなか評価が難しいですが、自然の中で人工的なところがよく目立つ。

小林

今の只見のみなさんにとってダムはどんな存在ですか。

良いとも悪いとも言えなくて

松崎

そうですね。ダム開発からはある程度時間

が経っていますが、うまく処理しきれないしこりのある問題かと思えます。なんと云ったらいかがいかわからない。良いとも悪いとも言えなくて、考えなくてはいけない。ただ、世代差がありまして、若い人からするとダムはあって当然、生まれた時からあった。ダムの影響で生活を続けている人も多数いらっしゃると思います。

小林

観光としてのダムはどうなのでしょう。

松崎

観光資源としては大きいと思います。ダムカードをお好きな方が結構いらっしゃる。J-POWERの展示施設に行つてダムカードを入手することに意欲を燃やしていらっしゃる方もおられます。

長々とお話ししてしまいました。田子倉ダムのレイクビューに到着いたしました。

田子倉ダムバス

雇用が生まれました

ダム開発ではかなり雇用が生まれました。ダム開発のマイナスイメージだけを持つわけにはいかない。田子倉ダムを開発する時、只見の人だけじゃなく、周辺町村からもかなり雇用を求めて人が集まった。そして、ダム開発の町みたいな普通の只見とは違う町の様子を見せていたと聞いています。ダム開発は大きな労働力を要する事業ですので、多くの只

見川流域の町村の方たちが働いて、賃金を得て、生活の助けになったという話も聞きました。

自然に与える影響は かなり大きい

ですが、ダムが自然に与える影響はかなり大きい。只見川はもつと川の水量も多かったみたいです。毎年、サケやマスなど回遊魚が遡上してきた。サケやマスは人々の大変重要な蛋白源として役立っていました。ダムができていく過程でサケやマスの回遊はなくなつていきます。現在はほとんどない。奥会津全体の生態系にも確実に影響を与えた事業でした。漁業権の問題も賠償問題として大きく取り上げられました。

田んぼにも影響があったようです。只見川の水をダムが排水する形になります。雪解けの冷たい水を当初はそのまま田んぼの用水として利用して、その結果、何年間か不作になつた。それも補償の対象になりました。

ダムができる前とダムができた後の生活は只見町でも大きく変わっていった。莫大な補償を得た方もちらほらおり、ダム景気によって新車を買った方が嬉しそうに写っている写真も私は拝見したことがあります。田子倉集落にいた人たちはダムができた後は各地に移転していった。只見町内だけではなく郡山市にも移転されていた方がいらつした。そこで新しい商売を始めた、そういうことが多かったようです。田子倉集落で自然物などを利用した生活を営んでいたのとは一転、旅館業や他の事業に手を出して、生活がかなり変わったみたいです。

小林

ありがとうございます。これからふるさと館田子倉に参ります。

ふるさと館田子倉

松崎

ふるさと館田子倉はブナセンターの附属施設としてブナと川のミュージアムと同じ扱いで田子倉集落の歴史や民俗を伝える博物館施設です。もとは個人で始められたものでした。古民家のような住宅を資料館として使い、個人でやっておられた。それを町が引き継いで、現在の形になっております。誰かのお宅を訪ねたような感じの展示設備になっていて、建物自体も面白いと思います。

ふるさと館田子倉でご説明するのが手塚スミ子さんです。田子倉集落の出身の方です。小学校低学年まで田子倉で過ごされた。身をもってダム開発の歴史を体験された方と言えると思います。僕が説明したのとは違う切り口で田子倉集落、田子倉ダムの説明をしていただけたと思います。みなさま、終盤でお疲れかと思いますが、我々スタッフは力を入れて説明を続けさせていただきます。

小林

新しくなつたのですよね。最近。

松崎

最近新しくなつています。設備が古いところがありますので5月からつい先月までカメムシとの戦いで、いつの間にか入ってくるカ

メムシをひたすら駆除しています。この只見町で博物館を営む醍醐味と言えるかと思えます。これから冬囲いの準備もしなくちゃいけない。

小林

只見町は除雪が上手ですからね。

井出

通常、積雪はどのぐらいですか。

松崎

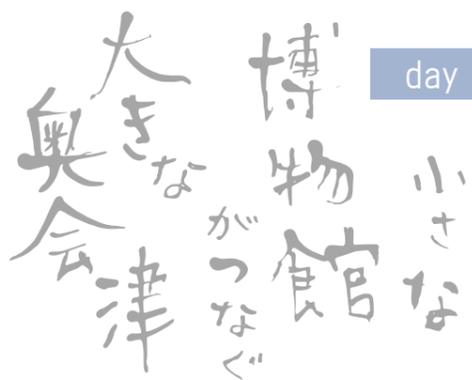
例年3mくらいですけれど、ここ2、3年は少なくなつてきているみたいです。田子倉館に到着いたしました。

ふるさと館田子倉

故郷への思いは 今も変わりません

事務補助員・手塚スミ子

田子倉に生まれ小学校1年生まで暮らした経験を持っています。幼少だったので覚えていたことは少ないですけど、でも、故郷への思いは今も変わりません。この田子倉館は皆川弥さんという人が最初に私費で作られました。田子倉で生まれて、小学校の4年生ぐらいまで育つて、それからお父さんの文弥さんたちと一緒に補償金をもらいながらここに移ってきた。彼は後に茨城に出て行って仕事もしてくるのですが、定年後にここに戻り、お父様が残された資料を元にこの資料館をつ



くられた人です。彼が一生懸命やってくださつたおかげで、彼が病に倒れた後も只見町で引き受けて、田子倉のことを伝えることができ資料館となりました。彼はもう亡くなつてしまつたのですが、彼のおかげで田子倉のことを伝えていきます。私たちもできるかぎり伝えていきたいと思っています。よろしくお願ひします。

小林

順番に展示室にお入りいただけます。ゆっくり行きましょう。

手塚

50世帯、290人以上が住んでいた田子倉の集落の写真です。

小林

ダムができる直前の写真ですか。

静かに暮らしていた 集落だった

手塚

そうですね。「ダムができるよ。始まるよ」と言われている昭和28、29年頃の写真です。江戸時代、最初は17世帯ぐらいが住んでいました。鎌倉のほうから落ちてきた人たちの集落でもあったので、あまり分家をせずに静かに暮らしていた集落だったのです。危機を乗り越えながら明治の頃から養蚕が盛んになり、他との交流もできるようになりました。そこから少しずつ人が増えていった。50世帯、290人ぐらいになつた昭和29年頃に、ダム建設計





い思いで

画が始まって、みなさんやむを得ずふるさとを追われるようになってしまった。昭和初期から国は田子倉ダムの建設調査に入っていた。尾瀬から新潟県の阿賀野川に出ていく260〜270kmぐらいある川筋に約20基のダム建設計画を考えて、その電力を関東の工業地帯に送電して、戦後の経済復興を図ろうという国策で行われたダム建設計画です。田子倉ダムも奥只見ダムも戦後の日本経済に貢献した。

小林
手塚さんは何歳だったのですか。

手塚
私は小学校1年生まで였습니다。2年生からはこっこの本校に移ってきました。1人の先生に1年生から4年生まで30人ぐらいの生徒たちが教えてもらっていました。5年生になると少し大人になるので、6〜7kmある道のりを本校までみんなで通っていた。冬場になると親元を離れて寄宿舎にお世話になって勉強していた。そういう不便なところであったせいか、すごくよく勉強する人たちが多くて、歴史の本を書かれた渡辺政吉さんという人もあの当時は珍しく大学に通って教師になられ、戻って来て田子倉の歴史を書かれた。素晴らしい先人がいるのだなと今でも感心しています。

田子倉を伝えたいという強

手塚

皆川文弥さんが山口弥一郎という民俗学者に師事して田子倉で暮らした人たちの生活や文化を伝える狩猟の道具や漁業の道具を集めて残しておいたのです。それを息子の弥さんが定年を迎えてここに帰ってきて、どうしても自分が資料を残して田子倉を伝えたいという強い思いで資料館を私費でつくられました。彼の思いが詰まっているので私たちもそのことを少しでもみなさんに伝えていければと思います。

そちらには、狩猟、漁業、山菜採取で自給自足のような生活をしていた、その道具が展示されています。珍しい道具が展示されています。ダムができる頃は大きな社会問題になっていたので大勢の文学者が関心を持ち調査に入っています。独自の目録で本を書いています。奥に展示しています。質問があればお答えしたいと思います。

原田
ダムに沈んだ土地の地名はどうなったのですか。田子倉は大字ですか。

手塚
昔、田子倉は田子倉村と言っていたみたいです。只見村に吸収されて大字田子倉になりました。

原田
小字はどんな感じですか。

手塚

本村、下原、宮原です。只見川の奥には只見沢というところがあった。もう少し奥には白沢というところがあった。その所々に集落があったのです。50世帯のうち只見村に残ったのが30世帯ぐらい。後は若松に12世帯ぐらいが移りました。

小林
会津若松ですね。

手塚
はい。旅館をやったりカバン屋さんをやったり商売をやった人たちもいました。後は、郡山、白河、福島、埼玉、東京に。ばらばらと散っていった。

木村
全部で50軒ぐらいのお宅がいろいろなところに散らされたわけですか。

手塚
そうですね。只見に残った人たちがかなり多くて、今は静かになりましたけれども、旅館をやった方たちが他にも。今はみな川旅館さんしか残っていませんが丸屋旅館とか、黒谷というところでは田子倉の倉から取った倉田屋というところもありますし、旅館系をやっている人たちがいます。

小林
なぜ旅館が多かったのですか。

手塚
そうですね。只見に残った人たちがかなり多くて、今は静かになりましたけれども、旅館をやった方たちが他にも。今はみな川旅館さんしか残っていませんが丸屋旅館とか、黒谷というところでは田子倉の倉から取った倉田屋というところもありますし、旅館系をやっている人たちがいます。

木村
そうですね。会津若松にも旅館があったのです。私たちは修学旅行に行くとき必ずそこに宿を取って枕投げしました。

井出
質問してもいいですか。当時、反対はなかったのですか。

最初は全員で反対しました

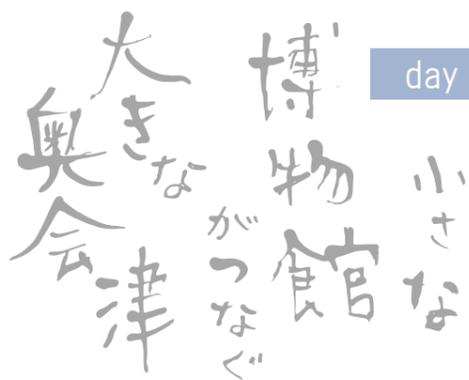
手塚
はい。最初は全員で反対しました。

井出
集落全員がしていたわけ。

手塚
はい全員で。「何もこの集落に造らなくても、もっと上流がいいじゃないか」とかいろいろ言っていて反対しました。後から入ってきた人たちもいますので、そういう人たちは補償金問題になってくると、その当時100万もあれば家が1軒建つような時代だったので。

井出
昭和30年前ですね。

手塚
29年、30年頃に。その頃はもう300、400、500という金額はすごく膨大な額。



家が何軒も建つ。交渉が進んでいくにつれ、もともと住んでいた皆川家の人たちがやっぱり土地とか田畑を守らなきゃいけないという気持ちが強くなって、5世帯7人の人たちが裁判も起こし反対運動をしました。

国策であるがゆえに

手塚
訴訟もしました。そこに反対派の人たちの書が残っていますけれど、反対はしたものの自分たちだけじゃないのと、国策であるがゆえにどうにもならないところもありますよね。なので、30年の秋に和解に応じたということです。

井出
これが漁業の道具。ヒキカギと言います。その当時はサクラマスがたくさん上がって来ていたのです。原始的なものですけれど、そういうものやこの大きな長いヤスで獲った。3mぐらいありますでしょうか。サクラマスが上がってくるのでヤスで突き、網で獲った。秋口だと1日100匹ぐらいは。

小林
そんなに？

手塚
はい。それを地蔵堂というところにみんなが集まって、世帯分に分けて冬場の蛋白源にしていた。飯館にして取っておく。

ダムは完成するまでに何年かかるのですか。

手塚

29年ぐらいから測量に入っていた。その後湛水が始まったのが34年で、竣工に至ったのは36年と言われています。6、7年はかかっています。

阪下

狩猟の対象として熊の前にはカモシカが主な対象だったそうですね。

手塚

はい。鹿も獲っていたようです。

阪下

カモシカは何に利用されましたか。皮、肉、いかがですか。

手塚

主に食料だったと思います。大量に獲れたかどうかはわかりません。大体がツキノワグマみたいです。小動物も獲られていたということです。鹿も獲っていましたが、皮を売ったというのはあまり聞かなかったですが、していたと思います。タヌキやテンの毛皮もあります。仕事、収入源でしたので、皮を売ったこともあったと思います。熊の胆嚢を干す道具もそこに展示しています。万能薬だったので高価なものだった。薬として売れるわけですから。

井出

6人ぐらいが同級です。1年生から4年生まで全員写っています。この人がこの資料館を作られた弥さんです。当時小学校4年生。見つけていただいてありがとうございます。景品がなくてごめんなさい。ここが田子倉分教場です。

手塚

この人たちが使っていたものがたくさん残されていてすごいと思います。

井出

これだけ資料を残して資料館としてやっているのはすごいよね。63年経つのか。

手塚

そうですね。ダムができて。それでもこれだけのものが残っています。

井出

また来ると思います。私は川内村から。ずっとずっと語り継がれていってください。

手塚

そうですね。ありがとうございます。

井出

お子さんはおられますか。

手塚

います。東京に出ています。

井出

やはり東京に。

先日、八ッ場ダムに行きました。あそこは

集団移転地、代替地が用意されて、そこにみんなで移転するという感じだったのでですけど、田子倉ではそういう話はなかったのですか。

手塚

なかったです。田子倉ダムより後に只見ダムになった石伏集落は田子倉ダムの下にあるのですが、その人たちは湯川村に移りました。集団移転をした。それは約束されたわけではなくて、田畑で農業をしたいという希望で自分たちから6、7世帯がまとまってそっちに行つて農業を今も続けています。田子倉集落は移転先を約束されたわけではなかったです。

小林

みなさんで只見のどこかに集まってという相談はなくてバラバラだったのですか。

手塚

そうですね。場所はそれぞれ。

小林

手塚さんは小学校1年生ですから。

手塚

話が起きていたかどうか。小学校1年生で勉強不足でした。

小林

小学校1年生で、手塚さんの只見の記憶と結びついているものはありますか。展示してあるものの中で。

ずっと伝えていけるように

手塚

田子倉ダムのダムサイドに若宮八幡神社が移設されています。田子倉出身の人たちが毎年みなで行つてお掃除して守っています。それをずっと伝えていけるように自分たちの子どもたちに呼びかけて、1年に1度みな川旅館でお昼を食べながら近況報告をします。そのことを続けていくためにも子孫を残したいという話が最近出ました。私たちは補償問題から田子倉を出てきた人たちの次世代の間なので、その次の世代を少しでも残していきたい。すごく大事だと思っています。

小林

井出さんは川内村から来てくださったのです。

井出

これだけの資料を集められて本当に素晴らしい。後世までずっと続けてください。

手塚

皆川さんにはすごく感謝しています。これだけ遺されて。

ダム建設は地域住民の生活に非常に大きな影響がある

指導員・石川貴大

スミ子さんからもご紹介がりましたが、ここは皆川弥さんの実家にあたりまして、民宿をなさっていたのでこういう造りになっています。当時の面影が残る展示施設です。当

手塚

ゲンベイは小さい頃よく履いていました。雪が降ると。今の長靴のような形になるようにハバキというのを上にかけてフカグツというのですけど、それを作ってもらってとても喜んで履いていた記憶が未だに忘れられません。私のおばあちゃんがよく草履を作ってくれました。草履を編む人がだんだん少なくなつたけれど、とても懐かしい思い出です。

井出

手塚さんが写っているという写真はどれですか。

小林

写真の前でお話を聞きましょうか。手塚さんの写真の前に行きましょう。

井出

この人でしょう。ほら。

小林

すごい。当たりですね。

井出

面影あったから。やっぱりそうだ。

手塚

小学校1年生です。

井出

この当時同級生は何人ぐらいですか。50世帯で。

時は皆川弥さんが田子倉集落出身ということ

で、田子倉集落に関する展示のみでしたが、今は町が取得して2階の展示は田子倉ダムだけではなくて、只見川本流沿いに田子倉ダム、只見ダム、滝ダムと複数のダムがあり、只見川流域における電源開発の歴史と人々の生活の変化について展示を行っております。

2階部分では、主に只見ダム、滝ダムにともなう集落の移転について紹介しています。滝ダムができる時には、今も集落はありますが、十島と塩沢という集落の一部の人たちがダム建設にともなつて他の町内に移転されています。その上流の只見ダムでは石伏集落が田子倉集落のように全戸移転しております。ダム建設は地域住民の生活に非常に大きな影響があることがわかっていただけだと思います。

国策、国のためにはダム建設で移転しても仕方ないと最初は大きな反対はなかったのですが、やはり補償問題が浮上してくると生活の先行き不安などで反対運動が盛んに行なわれました。田子倉の補償金は結構な額が集落の人に支払われたという背景があり、その後、の滝ダム建設当時はそれを目当てに100軒ぐらい新設の家を建てて補償金をもらおうとした人たちがいたみたいです。

小林

引つ越してこられた。

石川

引つ越してきて家を建てた。そこは電源開発も完全にピシャッと切つて大きな補償額は支払わないということで対応したみたいです。

大きな奥会津
小さな博物館
小さな津

井出 補償金目当てで家をつくつた。

残しておきたかった文化や資料もなくなつてしまった

中野陽介

只見ダムに沈んだ石伏集落。この集落は補償でもめた。小さな集落で仲が良かったのですが、交渉の中でいくつものグループに分かれてしまった。手塚さんがおっしゃったように土地を見つけてそこに移転された方がいて仲が悪くなつてしまった。我々もこの展示をするにあつて石伏集落の資料を集めようと思つて、石伏集落出身の方に掛け合つたのですがほとんど資料が残っていないのです。やはりあまりいい思い出はなかったのかも。ほとんど資料がないという状況になつてしまつて、さつき石川君が言ったことの繰り返しになります。ダム建設というのは本当に地域社会にもすごく大きな影響を与えてしまふ。それによつて残しておきたかった文化や資料もなくなつてしまった。ということがいろいろな人から聞く中で分かってきました。

小林

ありがとうございます。名残惜しいですが、こちらで今日のツアーは終わりたいと思います。

伊藤

今日はどうもお疲れ様でした。

小林
ありがとうございます。

伊藤
私は会津出身ではなくて茨城から来ました。ちょうど震災の年、だから今年で9年目になります。私は会津人じゃないという思いがあつて、斎藤先生の絵を見ても私は懐かしいというよりどこか突き放したような感覚を感じています。今回ツアーに参加してこの地に根ざした生活、自然を見てあらためて会津の奥深さを感じました。参加してすごく楽しかったです。ありがとうございます。

中野
トラブルがありまして、色々準備してきたのに説明できなかったのが本当に悔しいですけど、多分うちの優秀なスタッフたちが説明したので大丈夫だと思えます。私も斎藤清さんの絵を見て、どちらかというと寂しい印象、寂しいというか雪国で生きていく厳しさを感じたし、その中に生きることの悲しさ、そんなものを感じていたので、今日はご説明を「合っているのかな」と思いながら聞いて面白かった。またぜひこういった機会を設けていただく、あるいはこちらも主体となつてやるべきだと思います。本日はありがとうございます。

石川
本日はありがとうございます。僕は只見ブナと川のミュージアムで勤めています、今年からこちらに来ることになりました。只見ダム、只見線、そういったことを勉強して

いくと只見町の現状を知る上ではやはりダムの影響は外せない。そういう背景があるから今の町があることもわかってきた。みなさんに説明できるように今後とも勉強しながら対応をしたいと思っています。

聞いてくれる人たちがいるからには

手塚
今日はありがとうございます。勉強熱心な方たちの前で田子倉のことを説明するのはとても恥ずかしかったです。24年間故郷を離れた生活をして、また戻ってきてからのこの生活でしたので、ここの勉強をするのも大変でした。でも、聞いてくれる人たちがいるからには少しでも勉強しなきゃと思いつつ今に至っています。ここの資料館も弥さんのおかげであると同時に中野さんたちのおかげです。そうして発掘してくださる人たちもいるので、私も自分が知らないことは勉強してみなさんにお伝えできればと思っています。小学生のままではいけないので勉強しています。今後ともどうぞよろしく願っています。

小林
みなさまありがとうございます。最後に井出さんからも願います。

井出
最初に電話があった時に「どういった連携なのか」と半信半疑でした。こちらに来て福島県は広いなとまず感じました。私どもの川内村は浜通りです。中通りがあつて、会津

地方、さらに奥会津、やっぱり広い。私は今日1時間ちょっとお話しさせてもらいましたが、斎藤清美術館にも感動した。雪国の版画がとても感動的。今も小さいですけど、小さい頃を思い出しました。

点を線で結ぶ企画だった

双葉郡も昭和39年だったと思いますが、反対運動があつて原発ができませんでした。こちら昭和30年に50世帯が全員反対でも田子倉ダムができた。同じ電源ですよ。浜通りの原発も電源で、やっぱり安全神話の原発があいいう事故を起こした。「これからどうする」という時に、同じようにこうして語り継げる人が我々の地方でも必要だと感じました。バスの中でも申し上げたように5町村の人口がほとんど少なくなつて、高齢化率が上がる。何もしなければ人は入ってきません。こうした資料館も美術館もそうですが、一つの施設が点と点としてあります。今回は博物館を中心にこれらの点を線で結ぶ企画だった。大変素晴らしい企画だと思います。

我々も原発の廃炉が観光地になるように働きかけなくちゃならないのかな。本当にこういった資料館が残っていることは素晴らしいことです。みなさんお疲れさま。今日は勉強になりました。

小林
どうもありがとうございます。本日は終了します。明日また元気に1日回りしたいと思います。



day 2

スタディツアー

日時：11月10日(日) 9:00~18:00
 金山町自然教育村会館(弥平民具展示室) →
 からむし工芸博物館 →
 三島町生活工芸館(振り返りディスカッション)

講師：五ノ井智徳氏(金山町教育委員会教育係長)
 榎本千賀子氏(元金山町教育委員会職員/写真家/写真研究者)
 齋藤理史氏(昭和村からむし振興室長)
 板橋淳也氏(三島町教育委員会生涯学習課長)
 展示案内：二瓶仁志氏(三島町生活工芸館長)



day 2 スタディツアー

大きな奥津
 小さな館
 博物館

金山町自然教育村会館(金山町)

事務局・小林めぐみ

おはようございます。「小さな博物館が
 なく大きな奥会津」ツアー2日目です。今日
 もよろしく願いいたします。みなさんと合
 流しながら金山町に到着しました。ここが旧
 玉梨小学校です。今は展示などにお使いです。
 こちらが金山町教育委員会の五ノ井さん、そ
 して昨年末まで教育委員会にお勤めだった写真
 家の榎本さんです。榎本さんは数年間こちら
 で「村の肖像」プロジェクトという写真を集め、
 お話を聞くプロジェクトをやっていたらっしゃ
 いました。お二人から金山町のことを教えて
 いただきます。よろしく願いいたします。

金山町自然教育村会館

五ノ井智徳

あらためましてみなさんおはようございま
 す。今日から参加された方もいらっしゃると思
 います。私は金山町教育委員会教育係長の五
 ノ井智徳と申します。よろしく願いします。
 この施設は金山町自然教育村会館といいま
 す。もともとは玉梨小学校という小学校です。昭
 和52年に廃校になった施設を改修して自然教
 育村会館として活用しています。宿泊もでき
 るように改修されています。2階の教室3部
 屋に金山町の玉梨地区のある方が集めた民具
 が展示してあります。まずは中へ。

榎本千賀子

おはようございます。今日から参加する榎
 本千賀子と申します。私は、2016年から

金山町の住民になりました。2016年の途
 中から、金山町の「村の肖像」プロジェクト
 という写真を中心に過去の町の映像を集めて、
 それを活用してこうというプロジェクトを
 教育委員会と実施してきました。今年の3月
 に写真集を発刊して、一度プロジェクトには締
 めくりというか区切りがついたところでは
 今も教育委員会と一緒に仕事をしながら、今
 後どう活用していったらいいかを考えていま
 す。このプロジェクトについてもご説明したいと
 思いますのでよろしく願いします。

小林

よろしく願います。では中に。

五ノ井

この施設は、金山町自然教育村会館と言いま
 す。この場所ですがみなさんにお配りした袋に地
 図があります。これをご覧いただきますと横
 に流れているのが国道252号線、右手が昨日
 ご覧になりました柳津町のほうです。左手の
 奥に行きますと只見町があります。只見町か
 らずっと東に行きますと、途中から南に行く国
 道400号があります。真つすぐ行くと、昭和
 村に行きます。その途中にこの玉梨地区があ
 ります。

金山町の東のほうに沼沢湖という大きい湖
 があります。観光の中心と言いますが、近くに
 キャンプ場もありますのでおいでいただきた
 いと思います。この自然教育村会館はもと
 もと玉梨小学校という小学校でした。昭和52
 年の3月に統合になったため廃校になった旧
 玉梨小学校の校舎、体育館を改修して昭和61年
 の7月に自然教育村会館として開館しました。

約1000人が宿泊できる施設となっています。

近くの野尻川での川遊び、登山や自然体験、
 蜜蝋づくり、わら細工などの体験ができます。
 2階は教室を改修して民具を展示しております。
 今年も、友好都市の埼玉県鴻巣市の小学生がサ
 マーキャンプで100人くらい訪れております。
 あと、「金山ふるさと回帰懐かし塾」という昔
 の物を集めたイベントでも300人ほどの人
 たちが集まりました。

金山町はこの施設ができる前の昭和53年から、
 自然教育村ということで都会の子たちに来て
 もらい、豊かな自然と接する機会をつくり、豊
 かな自然を背景として受け継がれてきた山村
 の暮らし、文化を体験してもらい、金山の人々
 との豊かな触れ合いを味わってもらおうとい
 うことで、都会の学校単位で受け入れを行って
 きました。

この施設ができる前はどこに泊まっていた
 のか。金山町には昭和48年にオープンしたス
 キー場があり、その当時、民間で経営してお
 りました。そのスキー場のある小栗山地区に
 は、当時16軒の民宿があり、その民宿で子ども
 たちを受け入れて自然体験を行ってもらった。
 昭和53年から平成2年の頃まで12年間で延べ
 35,000人の子どもたちが金山町を訪れて
 いたようです。単純に計算しますと、年間約3、
 000人を受け入れていたようですが、時代の
 流れによって金山だけでなく色々な施設がで
 きましたので、そちらに流れるようになって、
 小栗山の民宿も1軒減り2軒減り、今やってい
 るのは1、2軒くらいまで減ってしまいました。
 スキー場は、今は町営スキー場として経営して
 おります。

弥平民具

次に、この教室の隣3部屋に民具の展示が
 してあります。その民具は弥平民具と呼ばれ
 ております。弥平民具の弥平とは何かとい
 うと民具を集めた方のお名前です。栗城弥平さ
 んという人がこの民具を集めました。なぜ弥
 平さんが集めていたのか、やはり好きだった
 のが一番です。好きでなければ、ここまで集
 めることはできない。

ただ置いていたのでは、そのうちなくなっ
 てしまう。やはり昔ながらの民具を今残して
 おきたい。今というか後世に残していきたい
 ということで栗城弥平さんが戦後、自分のお
 金で買い取ったり、もらったりして収集して
 いました。当時は自分の蔵などに収めていた
 と思いますが、その蔵の中もいっばいになっ
 てきて、この旧玉梨小学校の一室を利用して
 展示を始めたのです。弥平さんだけでなく、
 この玉梨地区の方々、有志で玉梨民具保存会を
 結成して、弥平さんと一緒に民具を集めて展示
 する活動を行っていたようです。昭和61年に
 自然教育村会館ということで、この玉梨小学
 校を町で開設することになり、その時に2階
 の広い3室に移動して、一般の方にも見てもら
 うことになったようです。

普段は

オープンしていません

展示は普段はオープンしていませんので、希望、
 問い合わせがあった時に鍵を開けて見てもら
 うというなかなか見づらい施設になっています。
 昔は都会からの子どもたちを受け入れたりし



て活用していましたが、今は活用方法も決まっていけない。もっと使いやすい施設にするにはどうしたらいいか色々考えてはいますが、施設の管理は教育委員会ではなく観光の施設になっています。民具は教育委員会の管理で、管理も別々で、今後その辺を整理しながら、もっと使いやすい施設にすれば、奥会津のミュージアムの一端となっていけるのかなという感じはします。これから色々頑張っていきたいと考えています。次に榎本さんから説明をお願いします。

一番の特徴は 住民が参加すること

榎本

私からは、「村の肖像」プロジェクトについてご説明します。ここに貼ってあるものが、プロジェクトの一環で、これまでに集めてきた写真を使い、町の紹介文を考えてみようとするプロジェクトとしてつくったものです。このプロジェクトは、2013年から始まり、町の中で町民が実際に撮り、保存してきた写真を町民から募って集めて、それを町民のお話を参考に整理しながらまとめて、色々な用途で使っていくというものです。町民自身の視線からはどんなふうに見えるのか、この町の歴史が捉えられてきたのかを探り、町民の言葉によってこの町はどういう所なのかを振り返りながら進めてきたプロジェクトです。このプロジェクトの一番の特徴は住民が参加することにあつたと思います。

だんだんと

固い緊密なコミュニティが生き残っていて、そのコミュニティのあり方が、この町の人たちにとってとても大事なものとすることがわかりました。そこで、村の中のさまざまな行事、村の中で育つ子どもたちの姿を二つの章にまとめました。そして、最後の章は「村をみつめる目」としました。私たちが「村の肖像」を通して気付く前から、村のこと、町のこと、その歴史のことを、大切なことだと考えて、見つめ、残してきた人たちはいました。先ほどの弥平さんもそういう方だと私は思っています。その人々の仕事は、大々的には公表されていなかったかもしれませんが、少なくとも町の外には知られてきませんでしたけれど、地道な活動をしてきた方がいらっしやるのだと写真を調べているとわかります。そういった方たちを5人紹介して、それぞれの視点の面白さ、写真を撮る姿勢の違い、そういったところに注目した章を最後に設けています。

写真と民具を有機的に つなぐことで活用できる

金山町は他の町村と違いミュージアム、博物館としての恒常的施設は今はありません。妖精美術館はありますけれど、そこは観光施設となっていて、町のことを深く知り、考える施設には残念ながらなっています。しかし、博物館はないがらに、今持っている資産とか文化資源を今後どう役立てていくか。財政的、人材的な面でさまざまな困難がありますが、何かできないかと考えています。私関わっている限りで言えば、「村の肖像」プロジェクトの中には実は弥平民具にもあるような民具がた

町の人たちの支持も

先ほど弥平民具の話がありましたが、弥平民具の素晴らしいところは弥平さんという一人の方が、ご自分で町の暮らしの変化を感じ取りながら、消えていく民具に注目して、それ自分の力で集めたということ。玉梨の方に私も聞いたことがあります。弥平さんは目の不自由な方だったという話もあります。古道具屋さんのような仕事をしていた、障がいのためにそれ以外の仕事はなかなか難しかったというところも聞いています。周囲から古い物をたくさん集めてくることについて色々心無いことを言われたこともあるようです。最初は周囲の人たちには彼が何をやっているかわからなかったのだと思いますが、だんだんと町の人たちの支持も集まるようになったようです。

何を大事に思い、 何を残そうと思っているのか

町の人たちが自分たちで大事にしてきたという事実が、弥平民具の資料価値を高めています。「村の肖像」プロジェクトも町の人たち自身が何を大事に思い、何を残そうと思っているのかに学びながらつくってきました。今壁に貼ってあるものは、11月3日に町内4ヶ所の公民館で行われる文化祭に出品したものです。私はその場にいることができなかったのですが、町の人たちに町のことを色々教えてもらう呼び水になればと思いつくりました。これまでに、金山町の人たちとこうした簡単な展示をしながら、写真について話し合う機会となるワ

くさん写っていたりするので、この写真と民具を有機的につなぐことで活用できるのではないかと。こうした活動は、写真の利用を増やしてゆくだけでなく、弥平民具の新しい魅力も探すことに繋がるかもしれません。

金山町にも 歌舞伎を演じる人たちが

この壁の写真は小さいですが、少し説明します。この写真は山入地区の方で撮られたものです。只見寄りの布沢に抜ける峠に近い、金山でもかなり奥にある地区です。その山入の人たちが歌舞伎を演じています。これは大事な写真で、奥会津地域で有名な歌舞伎の残っているところというところと檜枝岐歌舞伎が一番有名ですけれど、金山町にも歌舞伎を演じる人たちがまだ残っています。毎年9月5日に上演するのですけれど、私も2回ほど出演させてもらったことがあります。その歌舞伎は今、集落に建てられた立派なコンクリート造りの舞台、施設で演じられています。そうなる以前の姿を伝えています。歌舞伎が極めて盛んだった戦前まではお寺に細木で組んだ仮設の舞台を建てたり、常設の舞台もあつたりしたようですけれども、そういったものがなくなった後、戦後に歌舞伎がどのようなところで演じられ、伝承が難しくなっていく中、も伝えられてきたのかを示す資料の一つです。

会場はどうやら山入分校のようです。横田に本校があるので、雪深い所です。冬になると通うのが大変で冬季だけの分校が山入にありました。その分校の小さな舞台を使って演じていたようです。この写真は昭和25年頃のものですが、こういった生活に根付いた

クシヨップを12回開催してきました。その記録がここに一部あります。後で少し見ただければと思います。ワークシヨップの場ではこうした写真の複製をお見せして、それについて簡単な説明を付しておきます。それで、みなさんと一緒に何の話でもいいですよ、おしゃべりをしていくと、写真について色々な情報を教えてもらうことができます。

例えばこれが八町の横井戸の所の百八掘田と呼ばれる、玉梨温泉寄りの所にあつた今はもう失われた棚田です。2017年のワークシヨップでは、事前に調べていたこと他に、ここは地滑りのために毎年田んぼの形が変わってしまつて自分の田と他人の田を取り違えてしまうこともあるような場所であつたこと、現在では杉林になってますよという情報などを教えてもらいました。こういう作業を繰り返してきたのが「村の肖像」です。

写真集を まとめることができました

今年の3月、こういった写真集をまとめることができました。これまでに約1万1千枚の写真が集まり、その中から図版として190点を掲載しました。町の人たちのお話から、やはりこの町では山や川などの自然との関わりが生活の中で非常に重要であつたこと、近隣の町村と比べても多い5つのダムが金山にはありますが、ダム建造がこの町に与えた功罪さまざまな影響が本場に大きかつたことがわかりました。そのことを写真集冒頭の三つの章には反映しています。

それから、金山では集落ごとに今も結束の

芸能がどの村々でも見られたということがわかっていきます。この写真は山入の写真好きの方、中丸正臣さんという方から提供いただいた写真です。プロジェクトではこうした資料を集めています。

小林

プロジェクトをやってみて、榎本さんはどんなことが気になってきましたか。

生活全般が 創造にあふれている

榎本

そうですね。この辺りの方々は野菜や米などの食べ物で自分をつくるなど、そもそも生活を自分たちでつくるということが当たり前であるような生活を長く送ってきていますが、そうした生活必需品だけではなくて、こういった楽しみを自分でつくってこられたということに興味を持ちました。町の最盛期を知る方々は寂しくなつた現状を嘆かれる方も多いですが、都市から来た私から見ると、文化祭で即興のお芝居をみなさんと演じたり、踊りを踊つてみたり、丹精込めてつくつた手仕事の成果を持ち寄つて、みなさんで賞を付けて、互いに素晴らしい声援を送つて盛り上げていくような、自分たちの生活を潤いあるものにしていくということが、この町の人たちは得意なんだと感心することが今でも多くあります。自分たちがしていることはたいしたものじゃないとみなさん謙遜されることも多いけれど、非常に貴重なものだと思います。自分たちの生活を自分たちで活気あるものにしていく力の強さ



に感じます。貨幣を使って何かを買ってくる、消費していくということとは全然違う、生活を自分たちで切り開いていくという力です。本当に生活全般が創造にあふれているような気がしています。その楽しさが写真の中にもたくさんあふれていると私は感じています。そして、それをどうにか伝えたいと思っています。

写真を撮ることで 自分の村を再発見

また、写真を撮ることで村の生活を華やかに、楽しいものにしてほしいなと思いました。戦後にはいらっしやいました。写真を撮ることで自分の村を再発見していく試み、「村の肖像」につながるような試みというのはあまり知られていなかったけれどもたくさん行われていたのではないかと気がしています。

工夫していった跡が たくさん見える

弥平民具の中には博物館にあるような、素晴らしい貴重な民具ももちろんあると思うのですが、それだけではなくて、いろいろな工夫をして、ある物をつなぎ合わせながら自分の遊びに使う物、生活に使う物、そういった物を工夫していった跡がたくさん見える、非常に生々しい資料であることが大切だと思います。例えば、野球のキャッチャーがかぶるマスクを手仕事でつくつたものがあります。これなども、手に入る物で自分のことをしていく、それで

生活を成り立たせていくことのです。こさをを感じる資料だと思っています。金山町の資料を活かす際には、そうした特徴を見せられるといいなという気がしています。

小林

ありがとうございます。ここで弥平民具を見て、最後にまた質問をさせていただきたいと思っています。

〈弥平民具観覧〉

小林

写真のプロジェクト、金山の課題、今後考えていることなどのお話をお聞きしました。「質問あれば、五ノ井さんと榎本さんにお聞きしたいと思っています。」

これは絶対財産

板橋淳也

三島町教育委員会の板橋です。これは絶対財産だと思います。昔の活動、思い出話をこういふふう資料にまとめるというのは、これはもうまさしくこの町の財産で、これをどういふふう活かすかがこれからの課題だと言っていましたけれど、そんなに慌てなくてもいいのかなと思います。地域の人たちが、この盛り上がりをどう次に移していくかが大事で、うちの町も全く同じ。やっぱり近隣町村なので昭和さんも只見さんもそういうふうにいると思います。こういう財産をどうしていくかがこれからの課題。奥会津の発展につながっていく貴重な資料で、こういう資料を

まとめるのは、もう最近はなかなかできない。それがしつかりまとめられていて、金山町さんはこの後す「いいことになると思った。感動しました。ありがとうございます。」

五ノ井

色々な人が金山においでになった時、我々はこんな何もないところに来てもらってありがとうございますと言いますが、こういうツアーに参加し、前段の会議にも出ていううちに、何も無いのではないということがわかってきた。無いものがある、何でもあるのだと気持ちが変わってきた。これからそういう気持ちを持って頑張っていけます。

板橋

地元の人は気付かない。五ノ井さんも私も生まれ育ってこの町にずっといるので気付かない。気付かせてくれるのは町外の人や、こうやってツアーに参加された人たち。それをどういふふう我々が行動に移していくかをアピールするもつと面白いと思っています。

参加者・原田洋二

このプロジェクトにとても興味があつて、後でまたお話をおうかがいしたいと思っていますし、この写真集は求めたいです。弥平さんという個人の方の収集が教育委員会に移行していくきっかけはどういうことだったのでしょうか。文化財であれば、教育委員会が率先して収集するべきではなかったのでしょうか。

五ノ井

この弥平民具、実はまだ文化財指定になつて

くということ、年に2、3回、3年間金山に通っているうちに、金山町の人たちの暮らしがとも面白い、すこく力のある場所なのだと思います。関わりができたので、ここに住んでもっと知りたいなと思つて来てみたのです。

事務局・川延安直

弥平民具をはじめて拝見してとても面白かったです。榎本さんが言っていた週刊誌をどう扱うかというような問題と本当に重なっている。原田さんの質問にもありましたが、結局文化財とは何かという話です。たぶん行政の整理では文化財保護法では分類上何かという発想になつてくるけれども、弥平さんはそんなことまったく関係なく集めている。分類上はその他になるものが多いと思います。農具でもない、運搬具でもない。風力発電は衝撃でした。

榎本

遊びの道具が面白いですよ。賭け事の道具なども結構残っています。

川延

猫の箱とか今に直結しているものを昔の方はどうつくつていたかという視点を持てる。過去にあった文化財というだけではなく、今はこういう素材を使つてやっていると昔はこれでやつていたというのがわかる。とても面白かったです。いい宝をお持ちだなと思われました。

五ノ井

生活の中で使っていたものは壊れれば捨てる、古くなれば捨てる。それが残っているのは、すこいと思います。

いないのです。文化的価値があるのは認識しているのですが。

原田

コレクションが文化財になつていないということですか。

五ノ井

なつていないです。この旧玉梨小学校を活用するため教育村会館を設置する前に、弥平さんと有志たちがすでにここを活用して展示していた。展示してあつた施設が町の施設として活用されるにあつて、展示してあつた民具も町で引き受けて宿泊施設に泊まつた人に見てもらおうとなつた。昔はこういう民具を使って生活していた。そのために、町で引き受けたという流れかと思えます。町でなぜ収集しなかつたのかは、お答えできないのですが、そういう流れでこの施設にこの民具があるのだと思つています。

小林

昨日の只見でも皆川さんが収集したものを引き継いでいた。志があつてやつていた方のものをきちんと評価して町が引き受けたということでしょうか。

榎本

只見の民具よりも弥平民具の収集は早かつたと聞いています。その時点でこうした民具の価値を認めるのはとても難しいことだったように思います。

原田

今、原発の被災地の自治体が復興で色々やっていますけど、復興計画上、家屋を解体していく。ああいう民具がもしあつても全部なくなつちゃう。ああいう民具がもしあつても全部なくなつちゃう。

榎本

見せ方を工夫してアピールしていくと、思つてもいない全国からの反応があるかもしれないと思います。

小林

原田さんが話されたとおり被災地の人たちにとつてもすこく参考になる事例になり得ますね。他に質問いかがでしょうか。九州からもご参加いただいています。だいが道具とか違いますか。

参加者・天津郁央里

そうですね。ボロ、ミノは九州にはないだろうな。やっぱりそういうのに行きがち。遊びの物とかを見ていなくて、もう1回見たかったなと思いました。

小林

最後にぐるりと回りますよ。名残惜しいですが、ここが育つていくといいなと思います。金山町の五ノ井さんと榎本さん今日はありがとうございました。

からむし工芸博物館(昭和村)

小林めぐみ

昭和村の「からむし工芸博物館」に來ました。昭和村からむし振興室の齋藤さんにご案内いただきます。齋藤さん、お願いいたします。今日は実演もやっています。

齋藤理史

やっています。

小林

素晴らしい。ちょうど良かった。

齋藤

それでは、これから「からむし工芸博物館」を見学していただきます。説明している間にも質問をがんばりたいだければ、答えられる範囲で答えていきますので、よろしくお願ひいたします。

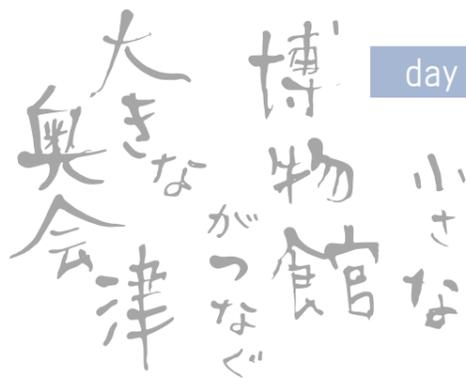
こちらはからむしに特化した博物館です。年間を通してではないですけど、このように地機の実演をやっております。それから糸作りですね。といいますのも伝統的工芸品に平成29年に指定を受けてまして、その指定の内容が糸績(う)み、手績(う)みで、織りは地機で織るといふ条件になっております。その実演をやっております。

小林

今作業をしていらっしゃる方たちは。

齋藤

地機を後世に伝えていく必要があるということ、平成13年頃に地機講習会を始めました。そちらの受講生で今年9年目の小林さんです。



小林
昭和村の方ですか。

齋藤
そうです。でも「出身は三島です。

小林
どうですか、魅力はどんなところですか。地機と高機は違いますか。

織姫研修生・秋山

私、高機はやったことないですが、一つ一つの工程が大事だということ、全工程自分でやるのが面白いと思っています。一つ一つが手仕事です。

齋藤

こちらで糸をつくっています。後で触れますが昭和村は織姫制度を平成6年からやっています。こちらの秋山さんは23期生。織姫は今26期です。23期で体験生になられ、その後研修生で3年目。村に来て4年目の織姫研修生の秋山さんでした。

小林

秋山さん、からむしはどんなところが魅力ですか。

全部がつながっているところが好き

秋山

畑から育てて、それが糸になって布にな

る。全部がつながっているところが好きですね。芋績（おう）みをしているとすごく静かな気持ちになります。

小林

からむしの織維で糸づくりをして、機で織る作業を見せていただきました。近くに寄っても大丈夫ですか。

齋藤

大丈夫です。近寄ってもいいです。

〈展示室へ移動〉

齋藤

これは明治5年の書物で、からむし栽培の一連の工程が載っています。それから大正期のからむし栽培の教科書ですとか、昭和初期のからむし栽培についての記事などが展示されています。先ほど実演している人が昔は麻を織っていたという話をしましたが、麻の織維がこちらです。近くに寄って見ていただけます。

小林

からむしと全然違いますね。白い。

ほとんどが

今現在も使われている道具

齋藤

葉がそもそも違う。昔は昭和に限らずどこでも麻の栽培をやっていたと思いますが、大抵です。いろいろな規制があって、現在はもうつくっていない状態です。生産工程は先ほ

ど映像で見ていただいた通り、畑を焼いてからの一連の道具がこちらに文化的、古民具的なかたちで展示されています。他ではもう古民具で展示されるだけの物ばかりですけど、昭和村においてはからむしの生産が続いておりますので、ほとんどが今現在も使われている道具です。ほとんど形を変えていないのはかなり珍しいと思います。

小林

この辺の資料は村の方から寄贈していただいたものですか。

齋藤

そうですね。私も当時の経緯は忘れてしまいましたが、村が主導して集めたというよりは、有志の方が残す必要があるだろうと集めたものを教育委員会と協力しながら残していった。

小林

少し金山と似ています。

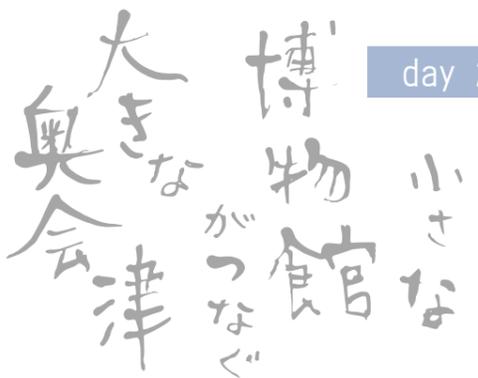
齋藤

その時の教育委員会の関わり方は、私は聞いたことがないのでわかりませんが、この他に民具を保管している所もあります。もう空き家になってしまったところで蔵を壊すことがあって、教育委員会に連絡が入り、蔵の中に保管されているもので保存すべきものがないかどうか確認して、それから取り壊すという手順に最近はなっています。

小林

素晴らしい。





齋藤 そうするとひたすらものが増え続けていきます。それをどうやってどこに保管するか。建物のスペースには限りがありますので、これからの課題になっていきます。

小林 昭和村でも廃校に置いていらっしやるのですか。

齋藤 そうです廃校です。はじめは旧喰丸小学校に置いていましたが、それを小野川分校に移した。金山さんはすごく整理されていて写真も充実した展示内容になっていましたが、うちはあそこまではできていない。最初は収納して置きっぱなしだったものを5、6年ぐら前に整理してある程度見てもらえる状態になりました。分類も必要です。人手もそんなにないのですけれど、少しずつ作業して当初に比べればかなり整理が進みましたがまだ終わっていない。

小林 そのうち見学ができるようになりますね。

近隣の町村すべてで栽培されていた

齋藤 そうですね。今もそれは大丈夫です。からむしは非常に換金性の高い作物だった

こうしたものを越後に持っていき、それからさつき実演していたように、糸にする作業をしていたわけですね。

自分たちで糸をつくり、織りをする

齋藤 そうですね。糸づくりから先は越後です。昭和村では主にここまで。需要が減ってきたものですから生産量が減って、それでもなんとか残していかなきやいけないということで、村で昭和46年ぐらいですか、農協でからむし部門を立ち上げ、織りまで昭和村でやってみようという動きがあって現在まで続いている。そして出荷までだったところが、自分たちで糸をつくり、織りをするが変わってきている。そういう変遷がある。

榎本 最近も越後に出荷はしているのですか。

齋藤 そうですね毎年。今は振興公社でからむしを全般的に扱っておりまして、毎年決まった量、例えば3貫目、5貫目を新潟に出荷している状況です。

榎本 ここでは織る量と出荷する量のバランスはどのぐらいですか。

と昭和では言われています。今もこの辺で残っているのは昭和村だけですが、かつては今回まわっている5町村、近隣の町村すべてで栽培されていたと思います。みなさんの目に入っただけか分からないですけど、金山町の古民具を展示してあった場所からむし引きをしている写真、道具も展示してありました。間違いないく金山町ではやっていただけだと思います。

からむしだけは絶やすなよ

今残っているのは昭和村だけ。なぜ昭和村だけに残ったのか。遺言でからむしだけは絶やすなよと、そんな言葉を言われる家庭が多かったみたいで、遺言でなくてもとにかくからむしだけはなくすなよ、残していけよという話があったそうですね。

それを村の人たちはしっかりと受け継いでいかななきやいけないと思った。そしてやはり換金性が非常に高かった。ここは山間の一番低い場所です。400m以上の標高があり、高い場所は600m以上ですので米がそんなに取れず、出荷できるような状態ではなかったということもあったと思います。からむしをつくらんとある程度生計が立ったのかどうか定かではないですが、明治6年頃の物産表、物の値段が書いてある資料が残っていて、それによると米1石、1石は2、5俵、150kgが1円30銭で取引されていた。からむしは10貫、1貫が3・75kgで、10貫は37・5kgで25円。1円30銭と25円。150kgと37・5kgじゃどう比べていいのかわからないところがあるかと思うのですが、反収と言いますか1反あたりで換算し直しますと、米は2円60銭ぐらいで、から

齋藤 総量の2割程度が新潟に行って、あとは村での消費とストックです。

榎本 こっちで織る方がずっと多いわけですね。

齋藤 そうですね。

小林 今もからむしが残っているのは、本土では昭和村だけと言われています。越後上布の今の材料は昭和村からだけなのですか。

齋藤 詳しくは分かりませんが、本当にちゃんとつくる物は昭和村産を使っていると思います。

小林 色々なものが入っているかもしれない。

齋藤 そうですね。輸入しているものとかが、場合によっては麻織物になっているかもしれない。ちなみに越後上布、ここに展示されているこれは本物です。触れますので、よかつたら確かめていただければ。

参加者・湯田守

何かからむしの需要を伸ばす努力をなさったのでしょうか。携わっている人は個人ですか、組合ですか。

むしは20円だった。

小林 お米の10倍ですね。

越後の商人が買いに来て

齋藤 そのぐらいの値段、それだけ価値ある物だった。生きていくためにどうしても必要なものだから、やっぱりからむしだけではなくすなよという言葉になって表れてきたのではないかと推測ですけど、それだけ村の人はからむしを大切に守ってきた。そこに、数は大分減りましたが今も残している背景があると思っています。

実際からむしの換金は主に越後の商人が買いに来て越後上布、小千谷縮の材料として売られていきました。まず出荷用のからむしを束ねます。1束100匁、375gです。これを全部で100束まとめて、なるべく持ち運びやすい形にして出荷していたそうですね。只見を通って新潟に、六十里もしくは八十里越えをして運んでいったといわれています。

小林 夏に取るのですよね、7月の末ぐらからでしたか。

齋藤 刈ったものから皮を剥いで繊維を取り出す作業ですね。

小林 組合というか振興公社を平成8年に立ち上げています。からむしは一括してそこで買入れ、売るかたちでやっています。需要が増えればもっと買入れもできる。人は戻ってくるし人口も増える。

湯田 需要が増えればもっと買入れもできる。人は戻ってくるし人口も増える。

齋藤 そうですね。

小林 そろそろ時間です。齋藤さんに私から一つ質問です。からむしのことを伝える工芸博物館がここにあることは、昭和村にとってどんな意味があると思いますか。

からむしに対して興味を抱くようになった

齋藤 まずはからむしのPRができています。けれども、むしろ外より村の中でのからむしに対する理解が高まってきている感じがします。それは織姫事業とも関連します。今まで村に残ってきたといっても、からむしにずっと携わってきた人以外はそれほど興味が高かったような感じですね。それが、織姫体験生が始まったことで、織姫の人たちやよそから来た人たちが一生懸命にからむしに対して取り組んでいる姿を村の人たちが見て、村の人がからむしとは何だろうとからむしに対して興味を抱くようになった。今まで興味を持っていなかった人も

興味を抱くようになったと思います。

新しく始める人たちが出てきたおかげで

昭和村は過疎化が進んでいて、後継者は村の外に出てしまっているところが非常に多い。からむしを代々継いできた家が次の代に渡さうという時に渡せる後継者が村の外に出ていってしまっってほとんどいない状態。そうすると途絶えていくしかない。織姫事業でからむしに対する再認識、再評価の機運が高まったことでこの博物館もできた。その後、今日実演している人もそうですが、新しくからむしを始める村の人が出てきた。おかげである程度の人数が、からむし保存協会の人数が35人ぐらいいて、これは20年ぐら前からあまり変わっていないです。当然年を取って後継者がいなくてやめざるを得ない家もあるけれども、その代わりに新しく始める人たちが出てきたおかげで、なんとかキープできている。

当時の内容に戻した方がいい

それからからむしに対する研究は20年前に比べてかなり進んだような感じがします。はじめはとにかくからむしをPRしなければいけないということで、観光的にやるが多かった。では、昔はどうやっていたのか、当時の内容に戻した方がいいのではないかと、例えばさきほど見てもらったビデオで、囲いをつくる場所がありました。私は平成8年に東京から1ターンのこちらに来ましたが、その当時見た畑の囲いはほとんどが青いネットでした。

それを見直して、昔は棒ガヤ（ススキ）で囲うのが正式なやり方だった。そういうふうに戻そうということで、今の畑の囲いはそういう形に戻しているところもあります。

最初からむし焼きをする時によく焼けるように茅を撒く。最近は棒ガヤを使っていたのですが、本当はコガヤを撒く方がいい。コガヤは空洞があるストロー状の茎で、棒ガヤは中が詰まっている。棒ガヤだと燃える量が多いので根まで焼けてしまう恐れがある。そうしたところも直して本当に戻そうという動きが出てきてまだ10年経っていないですが、保存協会でもコガヤを栽培しようという動きが出てきた。あれはただ生やしておく他の植物に負けるらしい。そういうさまざまな動きがあります。

移住者に対する抵抗は他の地域に比べて少ない

織姫さんは移住者、よそから来た人です。やっぱり山奥で閉ざされた地域だと移住者に対する抵抗感是非常にあつたと思うのですが、その人たちが一生懸命やってくれたことで移住者に対する抵抗は他の地域に比べて少ないと思います。

私が東京から来たのが平成8年。織姫制度は平成6年から始まっていました。私が来た時、織姫事業をやっていたのとやっていたいなかっただけで、私に対する風当たりも全然違つたでしょう。非常に自分にとってラッキーだった。その後から来る人たちも抵抗なく受け入れるし、入りやすいところ。

昭和村はからむしの他にカスミンソウも有名です。

くお願いします。三島町は人口が現在約1、600人の小さな町です。面積も90平方kmのこじんまりした町で18の集落があります。特別豪雪地帯ですので冬は雪に覆われた生活を営んでいます。11月の末から12月にかけて降雪が見られ12月中には確実に根雪になるような年が毎年続いています。概ね3月ぐらいまでは雪国の生活をしています。

只見川電源開発地域で町の中心を只見川が横断しております。戦後ダム建設がありまして、当時は約7、000人の人口がありました。ダム建設が終わりますと過疎少子高齢化がどんどん進み現在に至っています。高齢化率は52%、半数以上が65歳以上の高齢者です。

三島町では古くから雪国の手仕事として編み組細工がございました。後ほど紹介します。ヤマブドウヅル細工、ヒロコ細工、マタタビ細工を中心に古くから各家庭に引き継がれている伝統的な技がございました。生活工芸というところり生活に根付いた生活用品を自然素材でつくり上げる技です。

生活工芸運動

町づくりの一環として昭和56年に町は生活工芸運動という重要な運動を始めました。この生活工芸館は生活工芸運動を皮切りに、昭和61年に運動の拠点施設として建設されました。ご覧のとおりたくさん作品を並べてものづくりの拠点施設として運営しています。平成15年、奥会津編み組細工として3点、ヤマブドウヅル細工、マタタビ細工、ヒロコ細工が伝統的工芸品の指定を受けました。この指定を受けたことで大きなPRにつながりました。

栽培面積では夏秋につくる産地の中では日本一で新規就農の人や地域おこし協力隊のみなさんを積極的に受け入れていきます。去年は人口の社会的な増減ではプラスでした。会津では唯一だったのでちょっと取り上げられたのですが、そういった状況になってきています。

小林

からむし工芸博物館はここまでとしたいと思います。齋藤さん本当にありがとうございます。

齋藤

どうもありがとうございます。

三島町生活工芸館・工人の館(三島町)

板橋淳也

今日は三島町にお越しいただきありがとうございます。生涯学習課に10月1日に異動しました。前職はこの生活工芸館の館長を4年半勤めさせていただきました。ここ生活工芸館は昭和56年から続いている町の重点事業の一つ、生活工芸運動の拠点施設です。かれこれ38年です。今日は生活工芸館の役割、生活工芸運動について新館長の二瓶がご説明します。

雪国の手仕事として編み組細工が

館長・二瓶仁志

三島町生活工芸館長の二瓶です。よろし

材料採取が主に11月に行われるので、現在一番材料が少なく作品が手薄で、ご了承ください。米とぎザル、そばザル、そういったマタタビ細工をお手に取ってご覧ください。生活工芸館では町主催、協議会主催のイベントとして年間三つの工芸品展、祭りを開催しています。先月、10月に会津の編み組工芸品展、3月には全国の編み組工芸品展、そして6月にふるさと会津工人まつりです。来年度で工人まつりは34回目を迎えます。この小さな町に2日間で約2万人の方々が来町される大変大きなイベントとなりました。

アカデミー生

こちらの施設は2階にもものづくりができるスペースがあり、そちらでもものづくり教室、個別のお客様、団体や家庭単位で申し込まれてのものづくり体験、ヤマブドウヅルやヒロコ細工の体験が手軽にご指名いただけます。現在これらの編み組細工の技術を覚えたいという若い方から年配の方までがいらっしやるのですが、1年間三島町で田舎暮らしをしながら受講されています。アカデミー生が今年3年目になります。各年4名から5名の方が希望されて、町の一つの集落で共同生活しながら毎日こちらに通つてもものづくりの技術を習得されている方々がいらっしやいます。アカデミー生事業は定住も一つの目的として取り組んでいます。

小林

1年に何人ぐらいの方が参加していますか。



二瓶

今年が3期で、1期生が4名、2期生が5名です。1期生で残られている方もいらっしやいます。1年頑張つて戻られる方が半分ぐらいですが、残られた方には今も編み組に携わる仕事をしていらっしやる方、中には別な仕事を探しながら趣味として編み組をやっておられる方もいらっしやいます。

この向かいに「工人の館」という施設があります。昨年改修しました。アカデミー生が習得する作業場所、町民が無料で活用できるフリースペースがあります。後ほどご案内します。現在、友の会が約150名加入されています。こちらに出席されているのも友の会の会員の方々です。人口の約1割程度の方々編み組木工、ものづくりに携わっていらっしやる。町の一大事業となっております。小さなながらも町民みんなでがんばっている町です。ぜひご支援よろしくお願いいたします。どうもありがとうございます。

泉を掘れ

板橋

後ほど「工人の館」に行き、生活工芸運動がどのように生まれたのか、精神的な部分を私から説明いたします。今日は私も金山町から参加して金山町の写真と展示を見ましたが、うちの町も昔の生活が原点。そこからこういう運動を町おこしとして展開しています。町長は8年目ですけど「町づくりは、泉を掘れ」とよく言います。口酸っぱく言います。過去に戻つて昔の人たちがどういう生活をしてきたのか、その生き方をもう一度見直すことで、これか

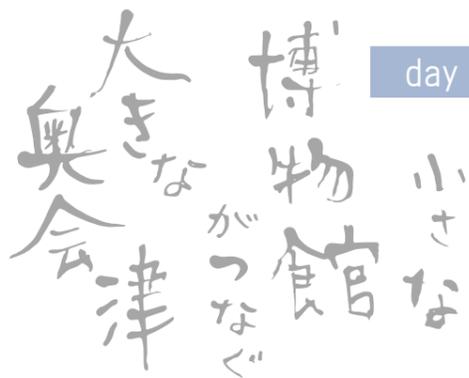
らの町づくりに必要なものが発見されてくると思う。

今回、金山と4町村を回つて、この精神がこの地域の大事なところと私は思っております。そこは三島も同じで、原点はみなさんが日常生活で使っていたものを現代にアレンジしていくこと。あえてうちは生活工芸という言葉を使っています。今は盛んに生活工芸と言われておますが、昭和56年に生活工芸という言葉を使つたのは、この町がスタートじゃないかとよく言われます。工芸品、民芸品という言葉を使っています。うちは生活工芸という言葉を使っている。なぜかという、生活の中で使っているものを工芸に生かすのが、この町のものづくりの一番大事なことだから。

「面白い」と再認識されて

例えばモンベ、サツパカマとうちらはよく方言で言うのですが、これは昔の農家の人たちはみんな自分でつくって農作業で着ていた。今、サツパカマをこうして売っています。うちの若い人たちは日常生活でも職場でも履いています。若い人たちの一つのブームになって「面白い」と再認識されている。これも一つの新しい文化であつて昔ながらの知恵を今の生活に使っている。こういった発想が、これからの町づくりに必ず生かされてくるのではない。昭和村さんと金山町さんもうちの町と同じ発想を持って、それを生かされていると思っております。そういった観点でものづくりを見ていただきたいと思います。

今にどう生かしていくか



金山の民具展示室に200年前のヤマブドウがありました。昭和の展示の中にもありました。うちにも150年前、200年前のものが残っています。こういった活動を今にどう活かしていくかが生活工芸運動のテーマです。技術、技法は先祖代々から引き継がれてきた。その先祖代々から引き継いできたものを今風の生活の中で使えるデザインとして考えてもつくりをしているのが今ここにある工芸品です。

当初はこの技術、技法は全然知られていなかった。普通に生活に使うものだから全然関心がなかった。ある一つのきっかけでここまで変わってきた。最初はお年寄りの方々が年金もろくにもらえない生活の中でのづくりをしていた。お猪口一杯のお酒を飲めるように、56年に始めましたが、今では車を年間で1台買えるぐらい稼ぐ人もいます。経済を私は否定しませんが、ですけどそういう精神論をしっかり持つてものづくりをしているというのがこの生活工芸館です。触ってもらって結構です。後で「工人の館」でもう少し詳しく説明します。

〈「工人の館」に移動〉

つくる場、見せる場、体験する場

板橋

ここは平成3年頃に建っています。当時は貸し館として主に木工をやる方が利用していましたが10年以上使っていないかった。良い建物ですからこのような内装工事をして、生活工

芸をつくる場、見せる場、体験する場というところでこの建物をつくりました。昭和村さんと金山町さんの民具資料室を見せてもらいましたが、ここも若干ですが民具資料室みたいなものをつくっています。ただ、うちはテーマを設けて民具資料を展示しております。あくまでも生活の中で使っていたものを基本的に一部資料室からこちらに持ってきています。うちも民具、こういう道具の収集業務を教育委員会で30年前からやっております。ただ残念ながら、展示して見せる場がなかなかできず収蔵室にずっと置いてある状況です。

今回「工人の館」ができるということ、一部でも展示物を定期的に公開していること、今年の10月からこういう見せる場にしてきました。生活の中で使っていた道具というのをテーマにしてこちらに展示しています。今私たちがやっている生活工芸運動のこれが原点ということでお見せしています。

アカデミー生は毎日火曜日から土曜日までの施設に来てものづくりをやっております。講師の先生が週に何回か来てものづくりやっています。後ろにいる彼女はアカデミーの1期生で、今はうちの伝承生として3期生のアカデミーのサポート、ここの管理、そういったことをやっております。彼女の他にも、OB、OGの3人が伝承生として活躍しております。

電源開発によって町はきつと良くなると

二瓶館長が工芸館の施設案内をしましたが、私は生活工芸運動がなぜ始まったかをお話します。戦前は自給自足の生活が主流でした。金山町

懸命稼ぐ場所が必要で、冬になるとみんな出稼ぎに行くようになってしまった。出稼ぎに行ったら帰ってこない。どんどんどんどん人口が減ってきた。その昭和40年代後半の国勢調査で、うちの町がワースト減少率、マイナスイ7.1%という県下最高の減少率を出した。この減少率は県下ではいまだにワーストワーンに入っている。なんとかしてこの減少率に歯止めをかけなきゃいけない。

リゾートに反対した

40年代当時の施策のよくあるパターンはリゾート計画。町を大手企業に売り込んで観光施設にしちゃえば雇用の場も増えて人もいっぱい入ってくる。だから、どんどんそういうふうにしたほうがいいというのが当時の大学の先生たちの答え。だけど、うちの当時の町長は断固反対した。大学の先生の意見を蹴った。なぜかという、もう自分たちは経験していた。大手建設会社が入って建設工事をする。そうすることで良くなるうとした町が、結局当時の人口より少ない年寄りの町になってしまったということを経験している。当時から断固としてリゾートに反対した。

ふるさと運動

だけど、この町をなんとかしないと生き残っていけない。それがうちの町の昭和40年代からのテーマで、最初に始まったのがふるさと運動。これは今でいう、グリーン・ツーリズムだと思ふのです。都会に住んでいる人たちは田舎暮らしを経験したことがないだろうから特別

の民具展示室にもあったとおりです。自ら生活するために自らのものをつくる。田んぼも畑ももちろん服もなるべく自分たちでつくる。つまりお金をかけない生活でした。当時の人たちは大変だったでしょうが、それを生きがいを感じて生活していたと思います。

それが、戦前戦後、昭和に入ってから只見川の電源開発が国の政策として始まり、当時、只見川と四国の四万十川が争った。只見川かそれとも四万十川か。近隣町村みんなどうにかして只見川に電源開発を持ってきたかった。当時の人たちは電源開発によって4、5千人の三島町が5万人になると考えていた。電源開発によって町はきつと良くなるという思いで頑張った。結局只見川で電源開発が始まり、阿賀川沿いから工事が始まって、特に金山町、三島町でも宮下ダムが始まった。おかげで昭和25年ぐらいの人口は7、700人。これがうちの町の最高人口です。7、700人が来たのです。

プラスチックのザル

今度は文化、歴史のお話をします。工芸館で見ていただいたザルも昔の先代から学んで、ここは竹が少ないから、マタタビを使ってつくったもの。当時の子どもたちもそういう親をまねて、マタタビのくずを使って鞠やボールをつくらせて遊んでいた。冬になると何もありません、雪がいっぱい降るのでやることがない。そうすると囲炉裏の周りで来年の農作業で使うものを直す。ヤマブドウのバッグが壊れたからちよつと直す。ヒロ口細工は昔スカリといってどこにでもありました。金山町にもうちの町にも飾っ

町民制度を使って特別町民になっていた。町民と同等の扱いをする。例えば、登録した方々の家に田舎のように「ただいま」って帰ってきて、田舎暮らしの体験をする事業を昭和49年にスタートしました。当時、日本経済新聞の1面にドーンとその事業が載った。3日3晩役場の電話が鳴り止まなかった。そのぐらいすごかったらしいです。最大800世帯ぐらいの人が登録してそういう田舎暮らしをしました。平成の代までやりましたが、平成に入ると衛生法の問題とかいろいろ問題があって、なかなかそういう民泊ができなくなってしまい、制度が途中でなくなっていました。最初は盛り上がった。だけど地元ではやっぱりいろいろ問題があった。登録している人たちや地区の人たちは喜ぶけど関与してない人たちは「いや、あんなのやったら別にうちらは何も関係ねえ」というのが半分ぐらいいた。

三島フォーラム

では、どう町おこしをしたらいいのか。そこでうちの町は10年間、三島フォーラムを開きました。このフォーラムは町民、町外関係ないです。こういう町だけで、町のことについて色々意見を言ってくれる人集まれという、ただそれだけです。町外の人とも関係なく、関心のある人は三島フォーラムに来ていただき、一つのテーマをもとにわいわいと喧嘩になるぐらい意見を交わしたといえます。こうやって意見交換したわけですね。それを10年間やったのです。

「俺、冬になると楽しみだ」

その中で、あるお年寄りから一つ意見がありました。冬になると我々は「また冬になるのか」「雪かきやらなくちゃ、今年大雪降んねえ」といってよく言っていますけど、ある老人がフォーラムの中で一言言った。「俺、冬になると楽しみだ」って。「冬になって楽しみってどういうこと？」っていうと「俺ものづくりできつから。冬になるとものづくりできる」とその言葉がうちの町の生活工芸運動の一つのきっかけです。

「なんで、冬になるとものづくりできるんだ？」「何をつくるの？」って、もう私たちが忘れかけていた。ああいった生活道具はプラスチックのザルや色々なもの変わった。けども「冬になるとものづくりするのが楽しみだ」ということをきっかけに、昭和40年代後半から民具調査が始まった。「どんなものをつくるの？」「どんなものが残っているの？」というところから始まった。当時千葉大学の先生だった宮崎清先生は町の名誉町民になられています。その方が学生を連れて民具調査に来た時に、昭和村と三島町の境にある一番奥の間方という集落に行った。そこのあるお店というか家に調査に入った。そこで、こたつの上にマタタビで作ったザルにみかんがいっぱい入っていた。おばあちゃんが「先生、どうぞ上がってください。おばあちゃんが先生、どうぞね。」「あ、大変失礼しました」って、マタタビでつくったみかんのザルをさつと下げて、プラスチックのきれいな入れ物に入れ替えて「大変失礼しました」って、出した。

てありましたけれど、スカリは畑仕事に必ず持つて行くもので、それを親が一生懸命つくっていた。小さいうちから親の隣、囲炉裏の周りでそれを見ながら、自分もつくってみたいということをつくるといいです。それが先祖代々引き継がれ文化に至っているのですが、その文化がなぜ一瞬なくなりそうになったのか。只見川電源開発によって都会から人がいっぱい流れ込んできた。そうするとマタタビザルを一生懸命つくるより、プラスチックのザルが簡単に安く買える。そうすると、こんな便利なものがあるのかとあって、では今度は地元の人たちは何が必要になるかというとお金が必要になる。お金が必要になってくるから、子どもの教育を変える。「お前は一生懸命勉強して、東京に行ってお金稼いだほうがいいべ」という環境が変わるわけです。そうすると、子どもたちは中学を終えると、集団列車ってありますね、列車に乗って東京にみんな出掛けていって、お正月になると帰ってきて、「こういう便利なものがあるんだぞ」となってくると、だんだんつくる技術はなくなる。

ワースト減少率

只見川電源開発が盛んになって、ダムが完成し始めると人口が減ります。工事が終わってみんな帰っていく。地元の若い子たちも、憧れて東京に行きたくなる。そうすると一緒に行って「じゃあ仕事してみないか」ということとでどんどん流出。それが戦後の高度経済成長期、昭和40年代。昭和38年から40年代にかけて第1期工事、第2期工事が終わっていくとどんどん人が少なくなりました。逆に、お金を一生



「このザルは誰がつくったのですか？」

先生は「ちょっと待ってください」って。「このザルは誰がつくったのですか？」って。「いやこれは、俺の父ちゃんがつくったんだ」から始まって、「これは何でつくられているのですか？」「マタタビっていうの」って。「マタタビ？マタタビは猫の好きなあの木ですか？」って聞くと、「そう。マタタビでつくってんだ」と。「あれは他にもありますか」と言つと、「隣近所みなどこでもつくってるぞ」って。そこから始まって、そういう文化が昭和50年代初期という時代にまだ残っているというのに先生は感銘を受けて、「これで一つの町おこしにできるんじゃないの？」って。「もう1回歩いて、町民のみなさんがどんなものをつくっているか調べましよう」と始まった。

まずは、手づくりものづくりの品評会をやりますということ、町を挙げていろいろなもの出してもらいました。例えば、私たちが小さい頃、ばあちゃんがいっつも背丈を物差しで計って、冬になると綿入れ半纏を作ってくれた。そういう綿入れ半纏を出している90歳のおばあちゃんがあった。他にもあのサツバガマやいろいろなものが出たわけですね。こんなに日常生活で使っているものをみんながつくっている。これを後世に残していくことを展開しませんかということが始まったのが生活工芸運動です。これはいまだにうちの町の重要課題として残っています。こういう形で生活工芸運動が始まった。

お年玉をあげられるように

うれしくて、またつくる。そうしたら「また前よりいいものをつくったんじゃないの」ってほめてもらえる。それがたまらない。嫁いでいった先の姑さんにもそうやってほめられる。彼女のものづくりの生きがいは、人にほめられる、喜んでもらえるものをつくること。そういう作品は見事です。

今、つくっている人が150人ぐらいいます。平均年齢は80歳代前半から70代後半の方。その人たちは生活工芸運動の中では第3世代ぐらい。もうその人たちは団塊の世代で、一生懸命仕事をして、60才で定年退職した。「第二の人生、俺はものづくりでやっていくんだ」とものづくりをする。でもその人たちの思いはさまざまで、先代から教わって技術を覚えて、その思いでつくっている人もいますし、中には「俺一生懸命頑張って5個つくるんだ、それを工人まつりで売るんだ」って言う人もいます。でも、我々の生活工芸運動はそうではなくて、先代から技術技法を教わって、人に喜んでほしいというものをつくる。それは結果的に表れて、久保田節子さんのものが売れないことはない。若手の人たちのものは売れ残っているものがいっぱいある。結果につながっているものづくりを楽しむ、そしてそれを喜んでもらえる人たちに来てもらって、経済につなげていくことが生活工芸運動の一番大事なところですよ。

売るためじゃないですよ

三島町生活工芸憲章というものがあります。これは、ものづくりをやっている人たちに一番大事なことです。ものづくりって売るためじゃ

当時の80代90代のおばあちゃんたちは、年金なんてかけている時代じゃなかった。年金制度は昭和の戦後から始まったので、微々たるものしか年金なんてもらっていない。当時の生活工芸運動、町としての見解は高齢者経済の発展になればいいということから始まった。お盆、正月に孫たちが帰ってくるからお年玉をあげられるように、こういうのをみんなで作って売ってみようかと始まったのが、昭和56年に始まった第1回の工人まつりです。当時は地元のお金でつくっている人たちが集まって、20店ぐらいで地元の人たちで始まった。口コミでお客さんと呼んだりしていたのが、だんだん38回になって、今では2万6千人ぐらいいらっしやる。別に私たちがごんごんPRかけたわけじゃないのです。

自分で見て触って

「いいな」って思う人に

なぜここまで広まってきたかという手づくりというものに対してお客さんがものすごく関心持っていた。本当に1点ものです。うちの今あそこに飾ってあるものも。我々は今も「大手デパートのバイヤーとかいっばい来るけど、絶対ダメだぞ」と言っています。インターネットでやればもっとよくなるけど、「インターネットもダメ」って。それは、自分で見て触って「いいな」って思う人を買っていた。だから、ここに書いてあります。「家族隣人が車座を組んで」。どうということかというけど、昔はみんな囲炉裏だった。囲炉裏にみんな近所の人も集まって、お茶飲みしながら、囲炉裏を囲んで世間話をしながら、ものづくりしたわけです。時には、「俺はこういうふうなやり方してっぞ」とか言いながらやる。そして身近な素材を使う。だからうちの町の生活工芸品はすべて自然から出たものです。それ以外は絶対使わない。ポンドも使わない。針金も使わない。全部自然のものを使ってつくります。

今90歳だったかな、久保田節子さん。工芸館に飾ってありますけど、今の皇后さま、雅子さま、

またそのの上の上皇さまがお買い上げになられたヒロコのカゴが展示してあったと思いますけど、あのおばあちゃんが今ものづくりをやっている最高峰の方です。もっと同じ年代の方々がいらっしやっただけですが、去年一昨年とお亡くなりになられて、今健在なのが久保田節子さん。今は入退院を繰り返しているのですが、それでも、この秋のイベントの時に新館長が呼ばれて、「ちょっとつくったから、これ、持ってけ」なんて、わざわざ電話跨越して作ってきた。見事なのですよ。

小林

張りになっていたりもするのではしょね。

喜んでもらえるものをつくること

板橋

そうです。館長も気付いたと思うけど、ヒロコバッグは他の人もいっばいつくっています。私たちは誰がつくったものかもわからない。だけど久保田節子さんのバッグはわかる。ちょっと触って、「らん。節子さんのバッグだけはわかる。つくっている節子さんの思い。小さい時からずっと親、おばあちゃんの手をみて、囲炉裏の周りで一生懸命つくった。お母さんのつくったものをまねて10歳でつくって、分解して、メモして。それを見ながらまたつくり直して、次は自分でつくってお母さんに見せる。「お母さん、ほらこんなのつくってみた」って。そうするとお母さんがほめてくれる。「いや、うまいのつくったじゃねえの」って。それなら次はばあちゃんに見せる。ばあちゃんもほめてくれる。

代に対して、振り返るとうちの町は、過去に戻って過去の人たちがどういう生活をしてきたのかを、現代のまちづくりに生かすことを、繰り返しやってきていると思っています。我々職員も町民の人たちもそう思っていると思います。これが、これからの時代に生かせる過去の人々の暮らし、生活の中の素晴らしいものが絶対あると思います。

榎本さんが写真を使って金山町でやったことは、僕にはものすごく新鮮で感動した。我々が生活の中で気付いていないものを、榎本さんみたいな人たちが来て発掘したことによって、「あ、す」く面白いものがあつたんだ」ってなる。それをどうやって町おこしに活かしているのかということにつながっていると思います。行政がやるのではなく地域の人たちが「もう一回やろうよ」という取り組み方をしていることが、私はこれからの過疎地域の町づくりで大事ではないかと思っています。生活工芸館が56年にできて職員が配属されている。昭和村はからむし館がありますから似ています。他にはない館です。生活工芸館は。そこを町として残している。文化を次の世代に残していくことも大事です。後世の人たちが生かして、その時代にあった事業に発展していけばいいなと思っています。今、アカデミーを始めて3年目です。これを始める時に昭和の織姫さんはすでに26期でした。昭和村まで行って、「うちらもやらせてくれ！」ってお願いに行きました(笑)。からむしは伝統的工芸品の指定を受けられましたよ、平成29年に。私は平成15年に三島町で指定を受けられる係でした。昭和村さんが29年に受ける前に資料を送って「頑張れ！頑張れ！」ってアドバイスをしました。

一生懸命生き延びる姿を

私はライフミュージアムネットワークの委員になっていて、この後川内村に行きます。ぜひこういう話をしたい。被災地域の人たちはものすごく大変ですけど、奥会津のこうやって一生懸命生き延びる姿を話せば、絶対ヒントになるかなと期待感を持っています。

三島町は河岸段丘で、田んぼも3反4反でもうちの町では大きい田んぼです。そういう小さな町ですけど一生懸命ものづくりをして、生活の知恵を次の世代に伝えていきたい。アカデミー生を始めたきっかけはそれです。先代の知恵と伝統の技、精神を伝えていくにはどうしたらいいか。今の60、70歳代の人たちに僕たちがしゃべってもなかなか伝わりづらい。やっぱり次の世代のここに残って頑張ろうという人たちに、そういう気持ちをしつかり持ってもらおう。次の世代に残るものに展開できればと思つてアカデミーをやりました。そういうこと繰り返してこの町もなんとか生き残り

地域の人たちが「もう一回やろうよ」と

最後にまとめます。私は今役場に入って30年ぐらいですけど、ごんごん先走っている時

ていこうと思っています。話がまとまらなくて申し訳ないです。私の話は終わります。

小林
板橋さんに「質問、感想あったらお聞きします。

原田
原田です。僕も全然まとまっていなくて、昨日から巡ってきたミュージアムの学芸の方、担当の方のお話しがみなさん自信たっぷり、僕は浪江出身ですが浪江にあまり住んでなくて、浜通り双葉地区にそういう施設があったとしても、これだけの熱意とか自信が感じられないだろうな。

板橋
なぜでしょうね。

原田
被災した後だったからかもしれないです。でも、ここに負けない文化があると思います。ただ、それを出すことが復興にどうつながるのか暗中模索の状態で、まだ自信を持って声に出せないのだと思う。その点うらやましい環境だと思います。こういう実績、積み重ねが次の文化の継承に結びつくのだろうと、この地区に来てすごく感じました。ありがとうございます。

小林
震災からまだ8年、9年です。三島町も10年間やったフォーラムで出てきたものが転換して生活工芸運動になったのですから。今後にきっと浜通りでもそういう言葉が生まれて

くるのかもしれない。

文化を足場にします。それでもやっぱり人は減り、高齢化が進んじやった。それでも文化の路線を守り続けてこられたのはなぜだと思いますか。

町の宝

板橋
住んでいる人たちの気持ちだと思います。この町に住んでいる人たちは1,600人いますけど、町全体、子どもたちもふるさとに誇りを持つという言葉が最初に出てきます。1,600人しかいないけれども、この町に住んで生きがいを感じたい。実はうちには国指定の文化財が三つあります。まず一つは荒屋敷遺跡という縄文時代の遺跡。国の指定に去年なりました。その前の国指定は重要無形文化財の三島のサイノカミ。18地区でそれぞれ独特のサイノカミを守り続けています。もう一つも国指定ですけど編み組細工は国の伝統的工芸品の指定、この三つは町の宝です。

地区プライド運動

地区のプライド、地区の人たちの生きがい、自分たちの地区への誇りはいまだにある。誇りを持つということは若い世代の人たちには苦痛かもしれません。「やらなくてはならない」という考えを持つ若い人たち、「守っていかなきゃならない」という気持ちでいる上の人たち。そういうギャップがあって「この町に住むのは嫌だ」と出て行く人だっていると思います。だけどこの町の誇りをしっかり持つと

というのがやっぱり先輩たちの気持ち。そういう人たちが我々のような次の世代につなげているおかげだと僕はつくづく思う。私も若い時は、「なんでこの町に住まなきゃいけないのかな」と思ったり、東京に憧れたり、そういうこともありました。でも今は、「ああ、やっぱりこの町に住んでいたいな」と思っているし、よく同僚と「面白くないけど面白くするのは自分たちだから」としゃべっています。それは地域の人たちみんなが思っています。

ここで面白く生活するためには自分たちが努力すれば楽しくなる。そういうプライドを一人一人が持っている。地区プライド運動はうちの町づくりの政策に入っている。第5次進行計画は令和3年度からなるのですが今から準備しています。地区制度というのがあり全職員が18地区のどこかの地区担当職員なんです。職員が40名しかいないですけど全員が地区担当ということどこかの地区に入っていく。課は関係なく。

地区の人たちに「この地区って何が魅力なの?」「どんなことあったらいい?」と聞きます。そんなことを職員が言いますから、地区の人たちは「行政が何言ってるんだ?」って、喧々諤々。文句言われるかもしれない。文句言われる覚悟です、うちらは。けどなんとかしないといけない。この町を守っていくにはみなさんが誇りを持たないと守っていけない。だから、みなさん地区の目標を立てようって、今も何回も歩いています。その回数を増やしていくと地区の人たちも「こんなことやれば地区が盛り上がるんじゃないか」とか言ってくれる。例えば「人少なえけど、この国道沿いに花いっぱい植えたら、もっとこの地区だって有名に

なるんじゃないか」とか、そういうことを地区の目標に入れるわけです。「ああ、それいいですね」「じゃあ、町も応援しますから」という感じ。地域の人たちが出してくれたことを町づくりにいかに生かしていくか。上から下に落とすのではなくて、下から上に持つていくような取り組み方をします。そういうことを昔からやってきているので、地区の人たちはプライドを持っている。それがこの町を残していくもう一つのポイントなのかなと思っています。三島、金山、昭和は福島県の高齢化率もワン、ツー、スリー。一番は金山かな。金山、昭和、三島も50%超えています。昔から一番人口が少なく高齢化率が高いのは三島、金山、昭和。これがずっと続いている。私らは、「福島県の地域の人たちも、なんとかしてこの町を残していかなくちゃいけない」という思いが強い。それで、どういふふうにおおして、町を残していくかということに対して、昭和も金山も三島もそうですが、一生懸命取り組んでいる。やっぱり生きがいを感じているのではないですかね。とにかく小さい町ですから、小さい地区がやることに対して町がなるべくバックアップする。そういうシステムに切り替えないと町は残っていかないと僕は思っています。

齋藤

板橋さんが言うものづくりに対する考え方は、織姫のOGで何年も残っている人がよく言う言葉と非常に似ています。織姫さんは一から十まで手作業、畑づくりから一連の作業を自分で体験できるところに惹かれてくる人が非常に多い。だから、手作業で昔ながらのことをやっ

ている人がすごく好きで工人まつりにもみんな行きたがります。そういうところで共通点があるのかなと思いました。

小林

みなさんからも「意見をお聞きしていきます。何かご感想やご意見があったらいかがでしょうか。

参加者・阪下昭二郎

阪下昭二郎と言います。金山町に住んでいますが、もともと大阪出身で、そこから色々外国も回って今ここに至った者です。昨日の午前中に金山町内で「金山の未来を考える会議」がありました。新潟県村上市の大滝聡さんというコーディネーターの方を軸に半年ぐらい続けています。そこで、やはり町内の課題として挙げられるのは、いかに職を自分たちでつくるかということ。そういう意味では、経済面、仕事。最低限の賃金を得るための仕事をつくるためにどういふことができるか。

その反面、先ほど板橋さんもおっしゃったとおり、絶対必要じゃないかと思うことは、町民が誇りを持つてることをみんなで発掘し体験できる町にすること。それが大切で、それに乗って何ができるかを考えていました。

お金を稼ぐという行為と生業として自分が誇りに持てるもの

話が違ってもいいですが、哲学者の内山節という方がいます。彼はお金を稼ぐという行為と生業として自分が誇りに持てるものは、

大きな奥会津
小さな博物館
小さな

day 2 スタディツアー

な環境づくりしましょう」と10月に異動で来て言いました。お茶飲みをして、色々な話をしながら、時には文句を言う人だっていますけれど、素直に自分が納得したら「そうですね」と言えたいし、面白いと思ったことを「やりましょう」とできればいい。それが地域づくりで、文化イコールド地域づくり。

国では、安部首相が「地方創生」と言っています。あれは、はっきり言って競争ですから。地域、行政、町村が良いアイデアを出して国に認められれば国から補助金をもらえますから。特にこういう過疎地域の小さな町は生き残るためです。この町をどう残していくか。アイデアを出し合う。考える。でもアイデアなんて止まっちゃうから、地域の人たちがどう活躍して、どういう方向でものづくりをして、国からの補助金をいただくかということも、行政サイドとしての競争です。どう残っていくか。

例えば、聞いたことあるかな。徳島県の上勝町。「葉っぱビジネス」で有名なところ。当時の町長さんたちは若い職員に「いろいろな先進地に行ってください」とよく言っていて、私も町長と呼ばれて上勝町に行った。

主役は町民

上勝町が、そこまで人気が出るのはもちろん「葉っぱビジネス」も面白いですけど、他にも面白いことをやっている。「ゴミ分別は54分別」「この上勝から絶対ゴミ出さねえぞ」と言っているし、地域によっていろいろアイデアを出し合っていて発表する。それで採用されたものに予算付けしようという地域が主役でやっている。やはりそういうところが全国的にも有名にな

るし、人がいっぱい来る。それも一つのアイデアだと思っている。

工芸館長やっていた時は150人の友の会をまとめていたのです。150人全員違う。色々なことを言ったりして、行政もどういふふうに関わっていいかわからない。工芸館長は大変で行政の話も聞かなくていい。地域の人の話も聞かなくていい。名誉町民の宮崎先生の意見も聞かなくていい。でもやっぱり主役は町民。だから私はほとんど1日中外に出ていて、それこそ90歳の久保田節子さんの家で3時間ぐらいお茶飲みして話を聞いた。それを財産にする。宝って地域の人たち、地域の人たちのアイデアだと思っています。だから、金山のあの写真は素晴らしいと思いました。

小林

「村の肖像」プロジェクトの今後の展開も主体がどこになるかがポイントな気がします。

大きな変化を

強く受けてきた町

榎本

どう長期的なプロジェクトに育てるか悩んでいます。今年の4月から、私が東京に生活の拠点が移ってしまっていて、そうするとなかなか今までのようには関われないです。私としては、町の中の人たちがもう少し主体的に関われるように引き継いでいければいいと思っています。どうすればいいのか、今も答えは出ていません。ですけど、試行錯誤していきたいと思っています。今日の話はすごくためになったと思っています。

ありがとうございます。五ノ井さん、昨日今日ご参加いただきました。いかがでしたか。

五ノ井

色々考えさせられるツアーでした。どこの町村もそうだと思いますが、今後何をしたいのか考えると、何か特別なこと、違うことをどうしてもやりたがる。そのほうが人を呼べるのではないかと。確かにその時は来るかもしれないけど、基本的に奥会津は同じものを持っているので、そこをもう一度考え直さなくてはいけないと感じました。

小林

ありがとうございます。天津さん。九州からお二人でご参加いただきました。感想を教えてくださいませんか。

天津

天津郁央里です。私は福岡でも町のほうに住んでいます。今回色々なところを旅して回っています。奥会津は町並みが茅葺き屋根だったのがすごくわかる。それを想像しながら運転していました。これだけ残っているのはすごい。何も調べずに来ていて、この会に参加できて良かった。今後ともつながっていきたいと思いました。ありがとうございます。

希望はある

山崎

山崎恵史と申します。実は45年日本を離れていまして、たまたま、彼女が今回参加して、日本の現状にぶち当たって非常に感謝して

あと一つ、金山町はからむしや生活工芸運動

みたいなのに、一つに町の軸を絞ってそこに注力することができなかった。それをしなくてもなんとか成り立ってきたとも言えるのかもしれない。話を聞いていてどういふことが金山の軸になり得るのかを少し考えていました。三島さんのお話でもダムの話がありました。金山はダムが5つもあって、それは只見も同じですが、只見線も走っていて、地域が大きな変化を強く受けてきた町の一つです。ダムとか大規模開発は、戦後日本の国策を考える上では、金山だけ只見川流域だけのことではない問題をいろいろ孕んでいる。

考える場所として

ダムとか土木遺構のツーリズムが始まっていますけど、そういった大きな公共事業の影響をきちんと考える場所がいつもどこかで必要で、金山は、もちろん文化もあります。他の周囲の町村と協力しながらそこを考えていく。からむしや編み組細工、只見のブナ林のようなものがどういふふうに変化していったか、それをどう捉え直せるのかを考える場所として、視点を置ける場所なのかなと思ったりしています。町の生活にどうそれを生かしていくか難しいところではありますけど。ただ、奥会津町村を回っていくとその変化と生活のことを考えていける。全部を回ると今と過去がつながっていく。それから、より良い公共事業だとかそういったもの考える場所にもなっていくという気がしました。

小林

てはもっともっと、人口が急に増えるわけではないですけど、生き残り活性化につながっていくような気がしました。

参加者・岡部兼芳(委員)

はじまりの美術館の岡部兼芳と申します。今日1日の参加でしたが、板橋さんの熱いお話を聞いてドキドキしました。と言いますのは、自分たちの美術館で考えてきたこととすごくクロスしている、重なっている部分が多く多。幸せはここにあるというのをわかっている。やって、それを軸に組み立てていこうとしている三つの町のお話を聞いた。「バイヤー来ても売るんじゃないぞ」。良いと思ってくれた人に、ちゃんとその人の手に渡ったほうがいい。つくった人も誰かのために楽しみにつくって、それが気持ちのある人に渡るのが一番。さっき貨幣経済とそういう楽しみ、相反するところのお話もありましたが、幸せに辿り着くための要素のそれぞれ大事な部分なのかなと思つた。そこを核に町づくりをされようとしている。もう間違いない。

好循環が今ここで

ダムの打ち上げ花火の後、祭りの後、あれは何だったのかというところから足元を見直す。どこに価値を置くか。復興がオリンピックの掛詞みたいに使われていますけど、それは表面的な感じ。足元を見直して自分たちが大事なことを積み上げて、そこで生まれた楽しみ喜びを見た人が、そこに魅力を感じて来てくれる、そういう好循環が今ここで生まれようとしているのが、すごくいいと思いました。



その一番見える形になっているのが工芸、からむし、文化財、写真。それが今後どんな形に落ち着いていくのかすごく楽しみ。

私は社会福祉法人で知的に障がいのある方のサポートする側ですけど、2年ぐらい前までは自立支援法という法律がありました。障害者自立支援法、障がい者を自立させようというのです。一番重きを置かれたのは経済的自立で、どうやって稼げるかでした。すごく反発、批判があって今は総合支援法ということになっています。そういう幸せをどこに求めていくかのボタンの掛け違いをどうほどこしていくか。ヒントをいっぱいいただいた。これから福島県からいろいろなことを発信していきます。ありがとうございます。

小林

ありがとうございます。それでは最後に板橋さんと二瓶さんに一言ずついただきました。

交流のきっかけは

生活工芸運動

二瓶

私が一言、板橋課長から二言ぐらいあるかもしれない。二瓶館長は何者だっって疑問を抱かれていますか。私も9月までは福祉の業務に携わっていました。高齢者、障がい者福祉、介護福祉、そちらをやっている、ちょっと元気のないおじいちゃんおばあちゃんの手が多かったのですが10月からこっちに来て、とても元気なおじいちゃんおばあちゃん、高齢者の方のお付き合いが急に増えました。

そのエネルギー、元気の源は課長が言ったように楽しみながらつくっている。生きがいにして、楽しいからずっと続いているのかなと思っています。

私は自宅がすぐ近くですけど、今までただの近所のおじちゃんおばちゃんだった人が、実はものづくりを一生懸命やっていらした方で、ものづくりの話で私もお話ができるようになった。そういう交流のきっかけは生活工芸運動。今まで家の中に籠もってやっていたものづくりが、たくさんの人とものづくりを通して交流を深めることで楽しみ、生きがいにつながる。それがこれからも続けていくための原点だと思っています。そこから先、経済的な部分は付いて回ると思いますが、高齢者福祉の部分で手先の細かい仕事は介護予防の面でもいいし、人との付き合い、交流を深めることで若返りにつながる。そんな福祉的な部分も大きいと思います。楽しみながら携わってもらえるように私もこれから館長として頑張っていきたいと思います。

うらやましがるれるじゃないですか

板橋

私はだいぶお話しさせていただいたのでありませんが、やっぱり楽しく、どう自分が生活していくかという気持ちを持つことで決まると思っています。館長も言っているとおり、普段は「膝痛え」「足痛え」と言っているのが、材料採集になると、膝の痛さはどこにいったのっていうぐらい山を駆け上っていく高齢者の人たちを見ると、生きがいってすごいなとつくづく思います。どの世代においても生きがいづ

くり、自分でふるさとに誇りを持てるような自分づくりが大事です。

高齢者社会をどうにかして定住促進につなげるのが、町長から言われている近々の重要課題です。定住促進をどう進めるか。この町に住みたい人は、何かしらの生きがいを見つけて住むことになってくると思う。住んでいる人たちが生きがいを持っていけば、毎日楽しい生活をしていけば、うらやましがるれるじゃないですか。「この町住んでみたいな」って。この学生たちも、高校は若松に通って、それから大学行ったり就職したりで、町から離れますけど、お祭りになったら帰りたいとか、ふるさとに誇りを持つようになる。こっちに帰ってくる機会が増えるのは、すごく大事かと思っています。間方って集落は一番山奥でほんとに子どもがいらないんですけど、お祭りを復活させるだけで町外に住んでいる人たちが戻って、みんなで盛り上がる。そこでもう町づくりになっている。そういう生きがいづくりを大事にしていけば、いろいろな町づくりにつながるっていいかと思うので、これからもそういう気持ちで頑張っていきたいと思っています。

小林

板橋さん二瓶さんありがとうございました。お疲れさまでした。とても濃厚なツアーだったと思います。ハードスケジュールにお付き合いいただき感謝を申し上げます。

事務局・江川トヨ子

今日、昨日と講師をしてくださった方たちのお話を聞くとそれぞれの町、村を本気で考えていることに私も熱い思いになりました。何て

言うかみなさんも感じたと思いますが、それぞれの村や町に入った時に同じ奥会津でも違う空気がそこにはある。それぞれの生活のスタイルが村や町に伝わっている。私たちにとってふるさととはどんなところなのか、私自身考え直したいし、今後もういった活動を通して、将来に向けて子どもたちが誇りに思えるような村、町を育てて、そしていずれそこへ戻る子どもたちが育ってくれることを願っています。みなさまと一緒に活動できたことに感謝申し上げます。ありがとうございました。

小林

ありがとうございました。「小さな博物館が」つなぐ大きな奥会津、もしかしたら続くといいなという期待を持ちつつ、今回はこれにて終了いたします。またどこかで一緒にできますように。



大きな奥会津
小さな博物館
がつながる

day 2 スタディツアー



様々な活動（5町村）が観られて良かった。（三島町、40歳代）

話し合える場として貴重な機会であると思った。（三島町、40歳代）

日本に於ける高齢化少子化の問題、現実に目を開かせてくれた機会でした。感謝します。（パリ、70歳代）

10日だけの参加でしたが、2日間とも参加したかったという思いです。日本各地に伝えたい!!すばらしいツアーです。（福岡県、40歳代）

地域の連携が重要だと感じた。地域の方々の自分の住んでいる所にプライドを持っている事が大事と感じた。（会津若松市、60歳代）

本当に色々と考えさせられたツアーでした。（金山町、40歳代）

ちがいを見せていきたいと考えていたが、やはり基本的なことは同じ、奥会津は一つと感じた。無理はせずがんばっていきたい。（金山町、40歳代）

大きな奥会津博物館 小さな

